

## 隠された近江の邪馬台国

本稿は NPO 法人守山弥生遺跡研究会（以下「研究会」という）の会員である私が、2016年5月22日滋賀県守山市における総会において、《伊勢遺跡で何が行われたのか—卑弥呼の墓は近江にあるのか—》と題して講演したものに筆を加えたものである。

2017年1月

千城 央

# 目次

はじめに	3
1 章 近江の伊勢遺跡は伊勢神宮の原型	10
2 章 伊勢遺跡は漢の明堂に類似	22
3 章 伊勢遺跡は天地の祭祀施設	29
4 章 7世紀のヤマト政権が隠した倭の邪馬台国	46
5 章 瑞龍寺山古墳群は火見の王墓	52
6 章 象鼻山上円下方壇は天地の祭祀施設	59
7 章 交易の窓口となった伊都国	68
8 章 武人物部の東遷	88
9 章 弥生の王墓は平地から丘陵へ	95
10 章 卑弥呼の王宮と墓地	108
11 章 邪馬台国とヤマト国を繋ぐ箸墓古墳	118
参考 近江を中心とした邪馬台国関連年表	127

## はじめに

私は邪馬台国の表記は邪馬壹国が正しいもので、その読み方はヤマタイコクではなくヤマイチコクであるとみている。また、伊都国の読み方を通説はイトコクとしているが、イチノクニと読む説を出している。

なぜなら、私が昨晚泊ったホテルのある所は守山市のつがやま都賀山であり、琵琶湖にある竹生島はちくぶすま都久夫須磨と表記されていたことがあって、古代における「都」の発音は「チ」・「ツ」・「ト」の中間音（子音）であったことによる。ただし、今日の話では聞いていてすぐわかるよう通例的な表記と読み方で話すこととし、その他についても同様とする。なお、本稿におけるクニ、同盟、連合の使い分けは、次のとおりである。

- ① クニとは、『魏志』倭人伝・韓伝にある小国のことで、律令時代の郡規模地域を首長が統治していた。
- ② 同盟とは、少数のクニが加盟してつくる集団で、有力なクニの首長が代表者となっていた。
- ③ 連合とは、多数のクニが加入してつくる広域国家で、有力者を王に共立し役人を置いていた。

私が邪馬台国の読み方にこだわるのは、どうみても倭国<sup>わ</sup>を代表する交易国家であって、市<sup>いち</sup>の国であったといわざるを得ないことによるもので、その所在については淀川の上流域<sup>おうみ</sup>一帯、即ち近江に山城<sup>やましる</sup>と伊賀<sup>いが</sup>を加えた説をとっているが、その理由は次の5点である。

## I 戸数7万戸を支える水田

前々著「近江<sup>おおいちおう</sup>にいた弥生の大倭王」（2014年サンライズ出版 以下「前々著」という）で指摘したとおり、当時開発途上であった東日本を除くと、『魏志』倭人伝にある邪馬台国の戸数7万戸を養えるだけの水田面積は、平安時代になってさえも近江を抜きにしては考えられず、洪水被災や戦闘で敗れた住民を西日本から東日本に移住させるための要地でもあり、九州や奈良では論外だということ。

## II 金印は奴国ではなく伊都国のもの

通説によれば57年に後漢光武帝から金印紫綬<sup>ごかんこうぶてい きんいんしじゅ</sup>があったのは奴国<sup>な</sup>であるが、次の理由からみてそれは誤りであり、伊都国連合の王が授かったものであるということ。

- ① 紀元前1世紀後葉の頃伊都国王墓とみられる福岡県三雲<sup>みくも</sup>南小路<sup>みなみしょうじ</sup>遺跡（糸島市）からガラス<sup>へき</sup>璧<sup>こんどうせい</sup>と金銅製

しろうぎかなぐ  
四葉座金具が出土し、同時期の奴国王墓とみられる同  
すぐおかもと  
県須玖岡本遺跡（春日市）ではガラス璧のみであり、  
前者を上位とみたことは明らかである。

- ② 海を渡った小国にすぎない奴国が、漢にとって金印  
を与えるだけの価値があったとは到底思えない。金印  
の読み方は「漢の倭の奴の国王」ではなく「漢の倭奴  
国王」であり、本来であれば「漢の倭国王」とすべきで  
あったが、「奴」は「匈奴」のように卑賤を表すため、  
あえて付されたと解する（参考『新唐書』日本伝）。
- ③ 福岡県三雲番上遺跡（糸島市）から1～2世紀頃のま  
みくもばんじょう  
とまった楽浪系土器と硯面すずりが出土しており、漢人の商  
人が来航して交易を行っていた可能性が高い。鉄器な  
どの重量物を積んだジャンク船が入港するには、強風  
波浪と浅瀬座礁を避け得る点において、博多湾より糸島  
らいざん  
の雷山川河口の方が勝っている。
- ④ 志賀島しかのしまの発見はいかにも不自然で、江戸時代に糸島  
まえばる さざれいし  
市前原の細石神社から持ち出されたという伝承には  
理がある。この神社は伊都国王墓のある三雲南小路遺  
跡に隣接し、祭神は日子番能邇邇芸命ひこほのにぎのみことと木花之佐久夜このはなさくや

ひ め 毘売とされる。命は『播磨国風土記』・『記紀』に登  
場する天火明命、彦火明命、饒速日神と同一神  
とみられ、天孫族である物部氏などの祖先神とされる  
が、実態は鍛冶族が遠隔地を結ぶための連絡手段とし  
ていた“灯火連絡網”の守護神であろう。

### Ⅲ 連合王は伊都国から邪馬台国に東遷

次のような歴史的経緯からみて、1世紀後半伊都国にいた連合王は近江の邪馬台国に、続いて奴国にいた同盟王は濃尾平野の狗奴国に進出し、両国は相互協力の関係にあったとみられること。

- ① 紀元前1世紀後葉のころ、金属加工を得意とする博多の奴国と交易を得意とする糸島の伊都国は、数カ国の小国が集まった同盟の代表国であったが、共に王莽が実権を握っていた前漢に朝貢を行い、従属国家として外交と交易関係を有していた。
- ② 伊都国同盟に参加する小国が増加し、伊都国王を連合王に共立して連合国家となり、57年後漢光武帝に朝貢して金印紫綬を得た。
- ③ 倭国を代表する国と認められた伊都国連合の下に、中

四国以東の加入クニが増加し、そのクニに市場を設置してネットワーク化を進めた。この頃から北九州では瀬戸内系の土器が増加している。

- ④ 朝鮮や北九州では長年に渡る金属加工や土器製造に伴う過度の森林伐採、また丘陵地における焼き畑農業があつて洪水や干ばつの被害を加速させたうえ、人口増加に伴う土地領有の戦いが頻発し、伊都国連合は東日本を含めた広域的な移住対策を迫られた。

#### IV 伊勢遺跡は天地の祭祀施設

邪馬台国に進出した連合王は、1 世紀末葉の頃近江東南部の野洲川扇状地やすに、倭国版明堂ともいえる伊勢遺跡を、狗奴国に進出した同盟王は、2 世紀中葉のころ美濃ぞうの象鼻山びさんに上円下方壇（3 号墳）を造り、共に天地を祀る祭祀を行っていたとみられること。

- ① 祭祀施設の形象は当時の朝鮮でもみられない特殊なもので、その源流は中国にあると考えられる。
- ② 中国では秦の統一以降、天地の祭祀は皇帝たる天子の専権事項であり、国内の王はもちろんのこと、周辺の支配国家や従属国家の王にそれが許されるものでは

ない。

- ③ しかし、100 余のクニに分かれていた倭国では、気候変動を乗り越えるため、クニの同盟や連合が前漢末期から朝貢を繰り返し、先進文化の導入を図ったとみられる。
- ④ 事の始まりは2世紀後葉の倭国大乱前の7、80年間、男王が統治していたという邪馬台国連合にあり、このことだけをもってしても邪馬台国の所在地論争は勝負があったといっても過言ではないだろう。

## V 7世紀のヤマト朝廷が隠した倭の邪馬台国

ヤマトは百済を支援するため朝鮮に出兵し、663年白村江で唐の水軍と戦って敗れた。以降、倭の邪馬台国はヤマトの歴史から隠されたとみられること。

- ① 『記紀』によれば、神功皇后じんぐうのとき倭の二人の女王が中国の魏ぎと晋しんに朝貢したとあり、女王が倭の邪馬台国の卑弥呼ひみこと壺與いちよであることは明らかだが、皇后はヤマト国のひとなので、朝貢した倭とは別の国ということになる。
- ② 別国にしたのは単なる誤りでなく、唐・新羅同盟が



本州に侵攻するのを防止するためであった。即ち、出兵したのは朝鮮半島の南の九州にある倭<sup>わ</sup>であって、東の本州にあるヤマトとは別の国であると主張するためである。その根拠として使われたのが、『魏志』倭人伝をはじめとする中国史で、倭は帯方郡の南にあるとした誤った方位にあった。

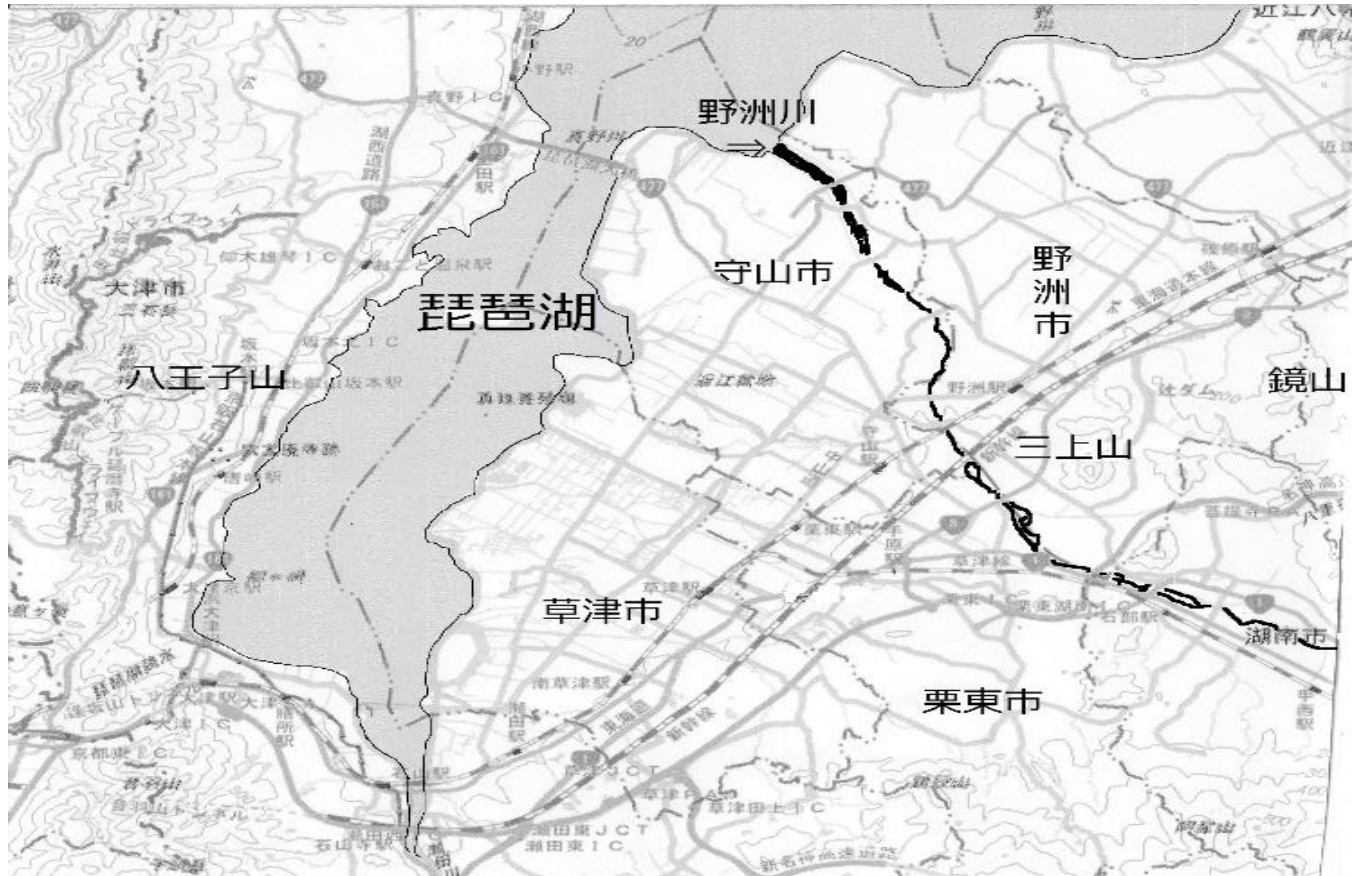
別国を主張した手前、倭の邪馬台国や狗奴国の痕跡が本州にあることは許されなくなり、近江ヤマト政権によって卑弥呼の墓や魏が授けた金印・銀印・銅鏡は破棄もしくは隠匿されたとみざるを得ない。

『記紀』も無論そうした主旨で編纂されており、あくまでもヤマト国の正史であって、倭国のものではないということになる。

# 1 章 近江の伊勢遺跡は伊勢神宮の原型

## 1 伊勢遺跡の周辺は弥生遺跡の銀座

図 1-1-1 野洲川下流域の弥生遺跡（研究会資料）



琵琶湖の南東部に流れ込む野洲川下流域の扇状地一帯は、かつて幾つかの川に分流して広大なデルタ地帯を育み、その流路は洪水が起きるつど変わったが、そのデルタ地帯の中に約 30 ha の祭祀空間を有する弥生後期中葉（1 世紀末～2 世紀末）の伊勢遺跡（滋賀県守山市・栗東市）がある。

この下流域は現在、野洲市・守山市・栗東市・草津市に分かれているが、10 km<sup>2</sup>の中に 120 カ所の弥生遺跡が密集して

いる特異な地域である。

中でも、伊勢遺跡の北西 2.5km の野洲川左岸にあった下<sup>しも</sup>なが長遺跡（守山市）は重要で、舟運による広域的な交易の拠点として邪馬台国の要となった集落と想定され、その周辺には多くの墓域が点在していた。

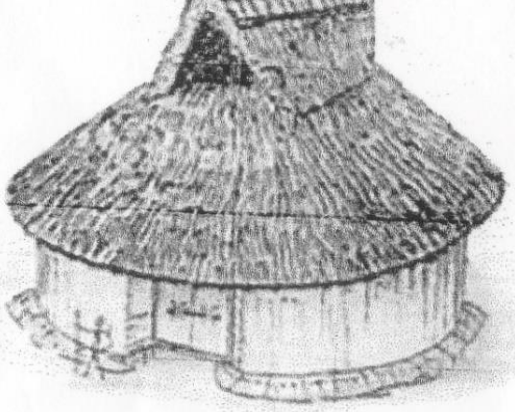
こうした遺跡の風景は、小国連合の盟主国であった邪馬台国が内外での交易によって成り立っていたことを示すもので、国名の「邪馬」とは自然の山ではなく盛土をした墳墓のこと、「台」若しくは「壹」とは漢語で「イ」と発音し、<sup>いち</sup>市のことを指しているとみた私の説に合致するものとなっている。

その他、弥生中期後葉の大規模環溝集落であった下<sup>しものごう</sup>之郷（守山市）、伊勢遺跡と同じ後期中葉の金属加工工房があった下<sup>しもまがり</sup>鉤（栗東市）、玉作工房のあった市<sup>いちみやけ</sup>三宅（野洲市）・<sup>からすまさき</sup>烏間崎（草津市）、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸合わせて 24 個を出土した大岩山<sup>おおいわやま</sup>（野洲市）などの遺跡もある。

各遺跡の中で私が特に注目したのは、環溝が 3 条から 9 条もあった下<sup>かべたて</sup>之郷遺跡の壁立式円形住居である。弥生中期の下之郷には倭式の竪穴住居は 1 棟もなく、五角形の竪穴

建物・大型の高床式掘立柱建物であった。壁立式円形住居は『魏志』韓伝に出ており、まるで中国にある塚のようだとの記事がある。

図 1-1-2 壁立式円形住居復原図（研究会資料）



したがって、この集落遺跡は渡来した韓のものづくり工人によって造られた可能性が高い。移住の時期は紀元前 271 年頃で、その目的は交易の拠点づくりと関係

があって、先進技術を導入しようとした北九州の倭人によるものと考えられる。ただし、後期になるとこの住居は見られなくなるので、高温多湿な倭国の気候には馴染まなかったのであろう。

なお、古田武彦氏が指摘したように、当時の中国では身分の高い者が平地に盛土をして人工的な山を造る墳墓と、身分の低い者が自然の山や丘陵を利用して造る塚墓を区別しており、塚墓には草葺きの円形建物を設けていた。塚墓は後で取り上げる同盟や連合の王墓と関係があるので、このことを記憶に止めてほしい。

図 1-1-3 五角形の竪穴建物（研究会資料）



次に注目したのは、下之郷遺跡と伊勢遺跡にある五角形の竪穴建物である。中央に炉があって壁際に貯蔵穴、湿気を遮断するための掘り込み溝のあることが

特徴的である。

この建物は金属加工や土器製作のための工房で、弥生後期高地性集落の京都府谷山遺跡（長岡京市）、大阪府尾生遺跡（岸和田市）などでもみられるもので、韓から持ち込まれて各地に広がったと考えられる。一般には竪穴住居といわれているが、住まいではないので竪穴建物または竪穴工房というべきである。

## 2 伊勢遺跡の調査結果

図 1-2-1 伊勢遺跡の現況

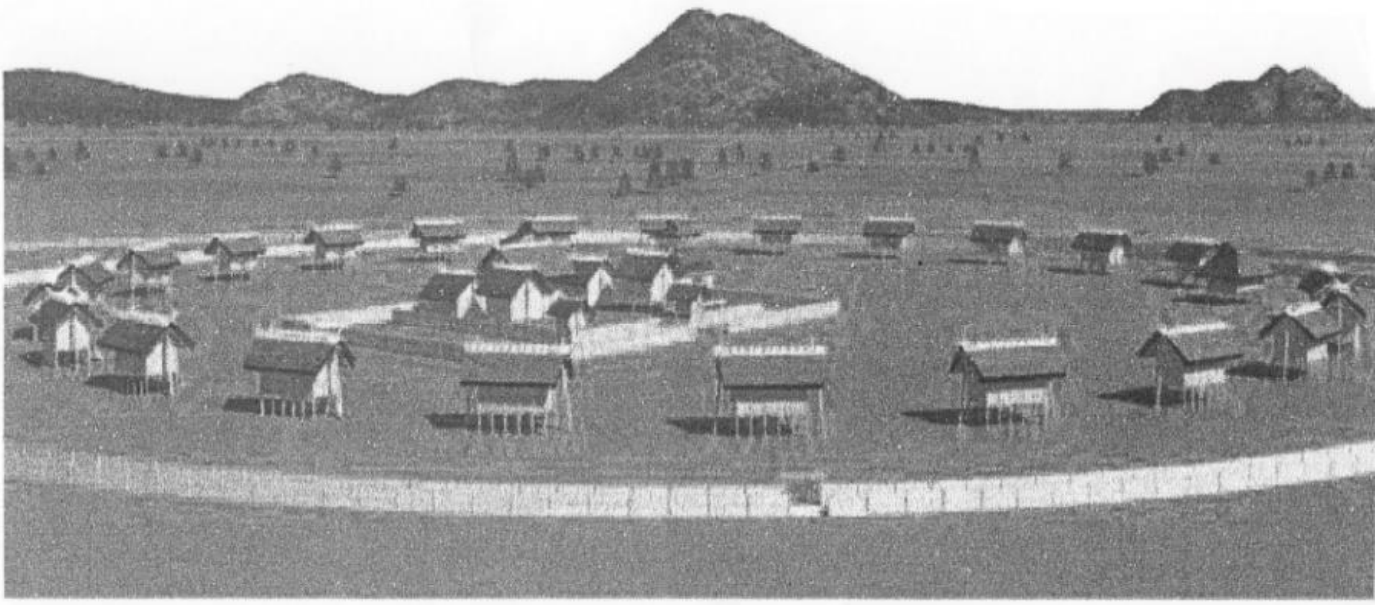


琵琶湖の東南部に面した野洲川下流域の扇状地にある伊勢遺跡は全体で約 30ha に及び、その一部が 2002～2012 年にかけて調査され



弥生後期の 1 世紀末葉～2 世紀末葉の約 100 年間、他に例のない数多くの祭祀施設とみられる建物などのあったことが明らかとなり、国指定の史跡となった。

図 1-2-2 建物全体の復原図（研究会資料）



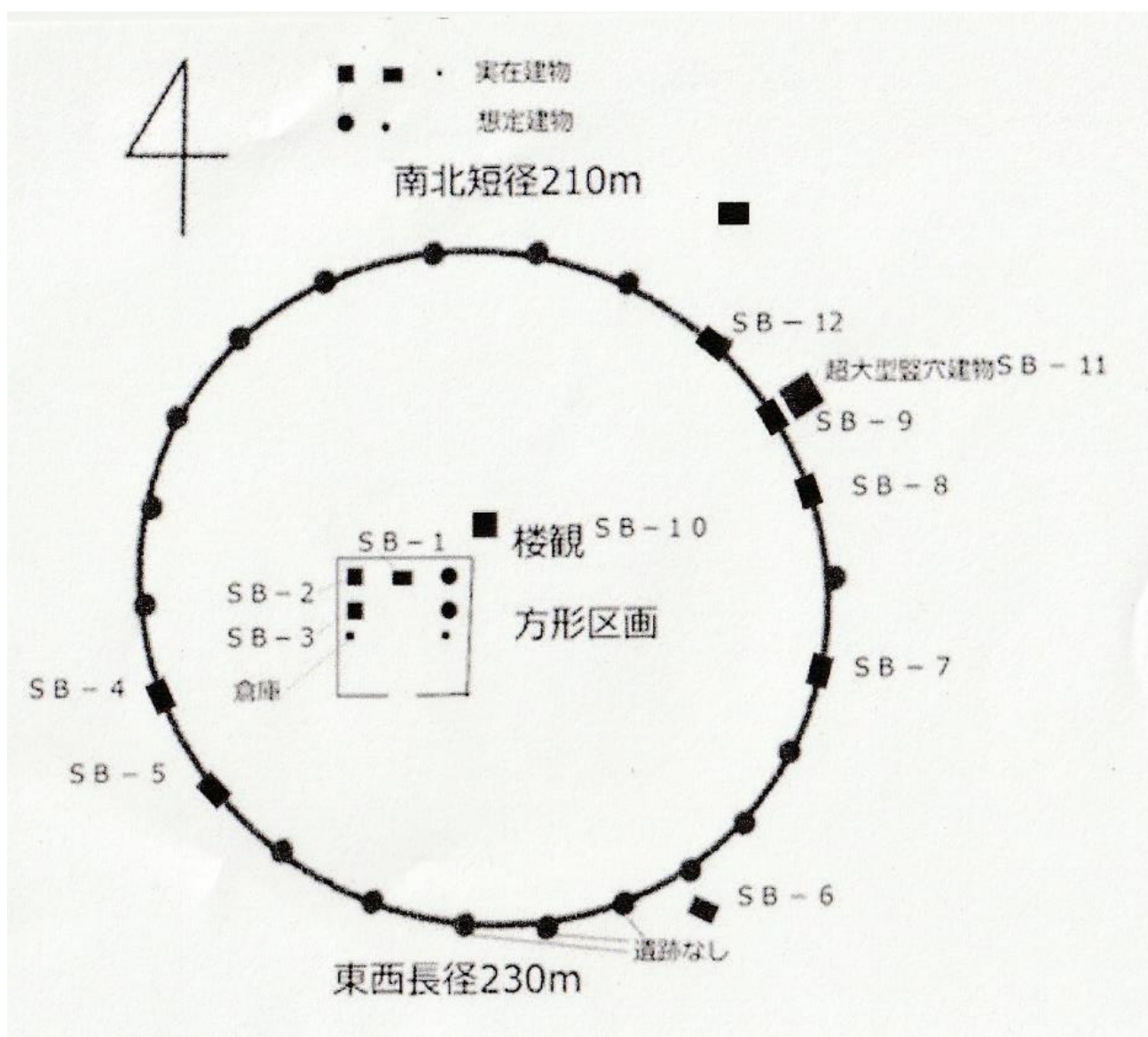
円周の外側に円弧状の第 1 溝（幅 1 m 浅い）、その内側に円弧上の柵列、その内側に円弧状の第 2 溝（幅 6.5m 深さ 3m）が掘られていた。円弧状溝の流水は聖水、その中は聖地で円弧は天を表し、聖地には祭祀関係者以外の立ち入りが禁止されていたであろう。

東の外側には直線状大溝、南の外側には配水溝、導水施設、導水溝、自然流路、クランク状溝があった。直線状大溝は物を運ぶため、クランク状溝は円弧状溝に流す水流を弱

めるための工夫とみられる。

この遺跡は 2 世紀末葉に解体され、柱などは抜き取られていたことから、倭国大乱後の 185 年頃卑弥呼が共立されたとき、大溝を使って材料を運び出し、宮殿に再利用されたとみられるので、卑弥呼の王宮はここからそれほど遠くない場所にあったと推定される。

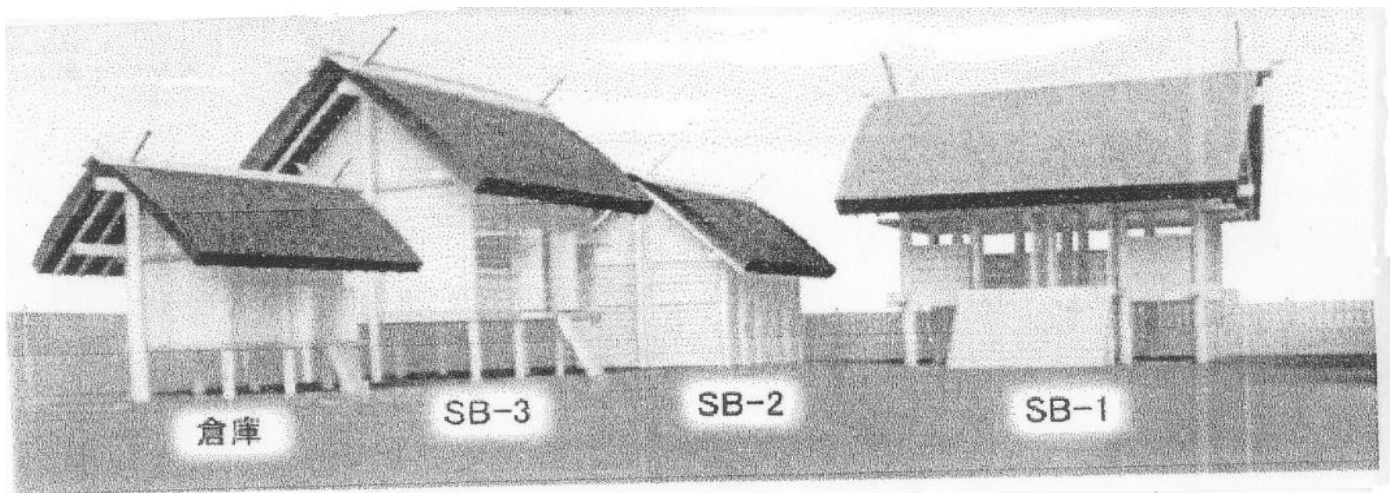
図 1-2-3 建物配列推定図（研究会資料より作成）



## ① 方形区画内の建物

S B-1 (主殿 高床式建物 床 86 m<sup>2</sup>)・S B-2 (副屋 近接棟持柱付平地式建物 床 57 m<sup>2</sup>)・S B-3 (祭殿 大社造 近接棟持柱付高床式建物 床 49 m<sup>2</sup>)・倉庫 (独立棟持柱付高床式建物 床 17 m<sup>2</sup>) は、円周の中にある柵で囲った方形区画内にあり、ここは政治祭祀空間とされ、ある年月を経たとき中央の主殿をはさんで左右対称になるよう右方に建て替えられたとされる。

図 1-2-4 方形区画内建物復原図 (研究会資料)



『記紀』神話にある近江の多賀大社と淡路島の伊弉諾神宮いざなぎに祀られたイザナギ神とイザナミ神は、倭国大乱後に卑弥呼がこの祭祀建物から移したとみられるもので、後述のとおりこの遺跡における天地の祭祀を廃止した真の狙いは、大乱の原因となった大地震の再発抑制にあったと思われる。



方形区画は大地を表し、主殿には父なる天のイザナギ神、副屋には母なる大地のイザナミ神、祭殿には連合王の祖先神を祀ったとみられる。

これらの建物は陰陽五行説にみられる輪廻の思想に則し、一定の年月を経たとき反対側に建て替え、陰から陽へ、陽から陰へと蘇りを図ったのであろう。

## ② 円周中央の建物

図 1-2-5 楼観復原図 (研究会資料)



S B-10 (楼観 屋内棟持柱付建物 床 81 m<sup>2</sup>) は、3層構造で正方形の四辺が東西南北に正しく合っていた。吉野ヶ里遺跡でも同様の建物があり、祭主であるシャーマン

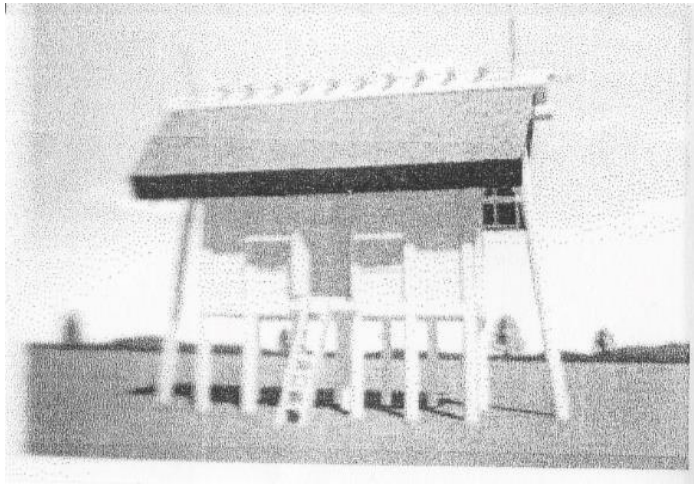
が連合王に代わって加入国の安寧や交易の発展を願い、最上階の中央で祭祀を行ったとみられる。

## ③ 円周上の建物

S B-4・S B-5・S B-7・S B-8・S B-9・S B-12 (祭殿 神明造独立棟持柱付建物 床 40~45 m<sup>2</sup>) の6棟は、

ほぼ等間隔にいずれも正面が円の中央部を向くよう配置されていた。

図 1-2-6 円周上建物復原図（研究会資料）



これらの建物は全部で 23 棟の配置を予定し、その数は中四国以東における邪馬台国連合の加盟クニ数に合致し、九州における加盟 7 クニ

については伊都国で祭祀を行い、漢が支配する属国地と支配外の独立地を区別して祭祀を行っていたと解される。

円弧状に配置したのは、前漢の都長安城の南郊にあった明堂並びに中国にあった 28 宿の星座図にヒントを得たことによるものであろう。円周内の建物総数の予定を 28 棟にしたのは、このことと関係があるかもしれない。

#### ④ 円周外建物

S B-6（祭殿 屋内棟持柱付建物 床 38 m<sup>2</sup>）は想定線上から外れるとともに構造も違っており、その左側の円周に沿った 3 棟分の発掘調査では建物跡が確認されなかったことから、これらは建築されなかったのか、あるいは後世

に破壊されたものか不明だが、建物は一度に設置されたわけではなく徐々に増加したとされている。

図 1-2-7 円周外祭殿復原図

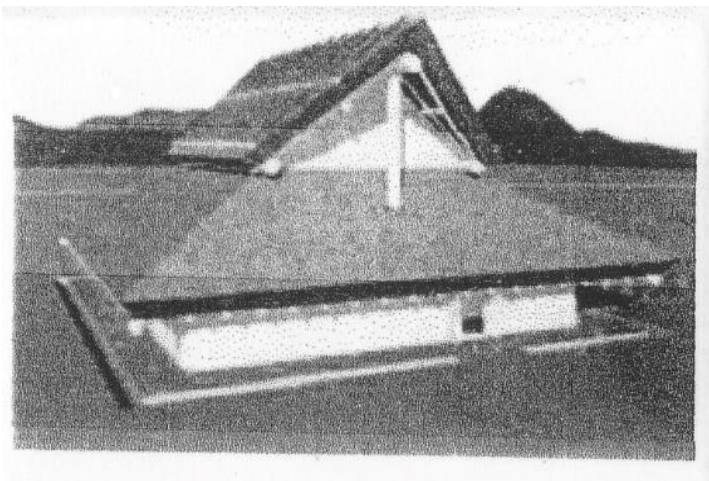


円弧を外した理由は難解だが、中国では天の形を円ではなく方と考える流派もあって、青銅鏡に天方地方を模したものがある。

日本の古墳の中に方墳や前方後方墳があることからすれば、天方を信じる加入クニのために造ったものであろうか。そうした3クニ分についてはあえて造らなかったことも考えられる。

### ⑤ 円周外建物

図 1-2-8 円周外客殿復原図 (研究会資料)



S B-11 (客殿 棟持柱付 超大型竪穴建物 床 185 m<sup>2</sup>) は円周外側北東にあり、連合加入国の王や連合の役人が祭祀のとき集まって祈願

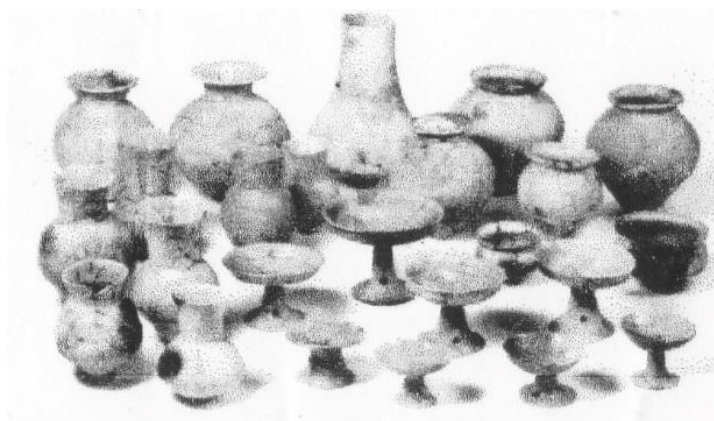
をしていたとみられる。

弥生中期の下之郷遺跡には韓からの渡来人がいたとみられることから、伊勢遺跡でも新たな渡来人の関わりがあったとみるのが自然である。

四周の壁には本邦最古の焼成レンガを使い、床は2層に分けて粘土を敷き焼き固めており、その源流は中国の江南にあるとされ、建造にはその方面からの渡来人が関わった可能性が高いとされている。

#### ⑥ 五角形の竪穴建物にあった良品土器

図 1-2-9 良品土器（研究会資料）



多くの良品土器が出土した遺跡西側の建物は遺跡建設時の作業小屋で、それが終わったときまとめて置いていった？

この工房の中で祭祀に使用する器具が造られ、良品土器とは日常的に使う土器ではなく、神への捧げものに使用した供献土器で、大地震が起きたときそのままにして逃げたと解される。

#### ⑦ 川岸にあった土器捨て場

図 1-2-10 土器捨て場（研究会資料）

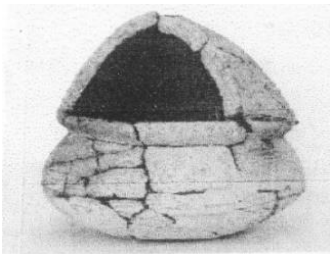


祭祀区域から離れた遺跡南西側に遺跡建設に従事した者の竪穴住居があり、日常的に使った土器や手焙形土器<sup>てあぶり</sup>が捨てられていた。

縄文時代の貝塚が単なるゴミ捨て場ではなく、豊穡への祈願と感謝をした祈りの場であったという注目すべき見解があるように、ここは捨て場ではなく祈りの場であろう。

#### ⑧ 手焙形土器

図 1-2-11 手焙形土器（研究会資料）



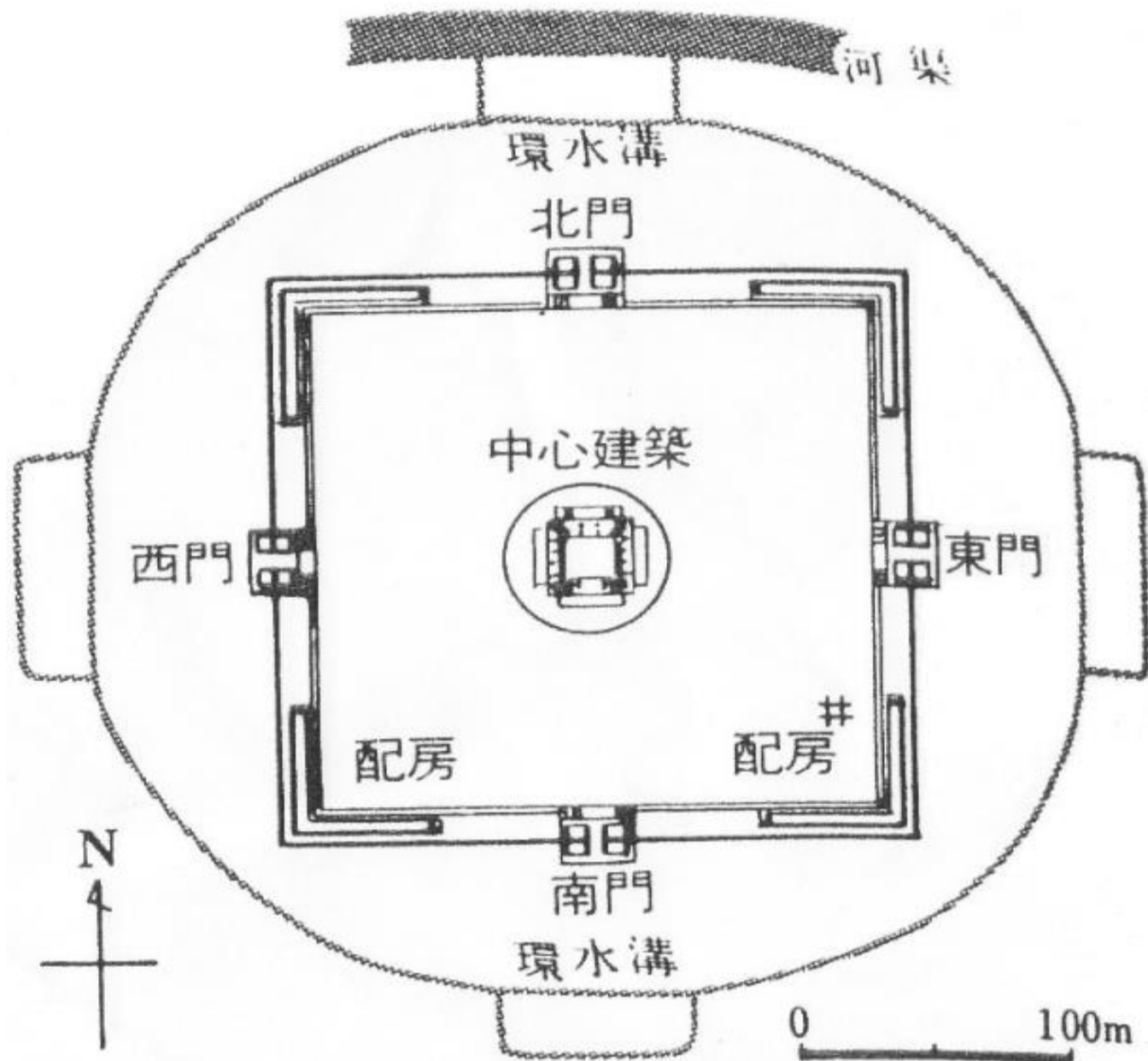
この土器は近江が発生地で関東地方でも出土しているものだが、使用目的が不明とされている。シャーマンが神がかりになるとか、工人が不眠不休で働くとき、大麻を燻して吸ったとみられる。大麻は縄文時代から使われていたという。



## 2章 伊勢遺跡は漢の明堂に類似

### 1 漢の都長安城南郊の明堂

図 2-1-1 長安城南郊明堂復原図

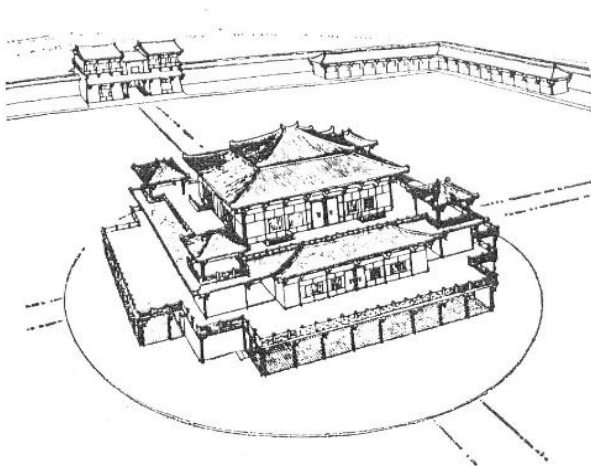


伊勢遺跡は他に類例のない極めて特殊な形象を有し、朝鮮でも見られないものである。したがって、中国との直接

関係が想定されることから、類似の遺構やその背景となった文化思想をみることとする。

中国では 1956 年から 1957 年にかけて、長安城の南門にあたる安門（後代の天安門）の南郊にあった明堂<sup>めいどう</sup>の遺構を調査している。その結果に基づき、建築家の王世仁氏が「漢安城南郊礼制建築（大土門村遺址）原状の推測」と題する論文を建築雑誌（1966 年日本建築学会）に掲載した。上図はそれを引用したものである。

図 2-1-2 中心建築物復原図



明堂の外側には天の川とみた渭水<sup>いすい</sup>から引いた河渠<sup>かきよ</sup>が掘られ、ここから水を引いて直径約 350m の環水溝<sup>かんすいこう</sup>に流し込み、その中に方形の塀がある。そ

の中心の基壇上に建物があって冬至のとき皇帝が豊作を祈り、干天のときは雨乞いをした。

環水溝は天を表し、方形の区画は大地を表すもので、陰陽五行説に基づく天円地方の宇宙観を体現したもののだが、

この施設は後漢の都であった洛陽城に引き継がれ、後代の王朝では円丘壇、天地壇、天壇と呼称が変わっている。

中心建築物が明堂で、中には皇帝の祖霊のほか父なる上<sup>じょう</sup>帝と五帝が祀<sup>てい</sup>られていた。その目的は天下万民に礼制を守らせ徳を広めるため、皇帝が自ら礼制を行って王化政策を進めることにあったという。

## 2 漢代に定まった中国の郊祀制度

秦の始皇帝から始まった皇帝の宗廟と天下国家の郊<sup>こう</sup>祀制度（皇帝の祭祀制度）は、主として東方の齊や燕の国にいた方士<sup>ほうし</sup>の献策によるものであり、伝統的な道教の教えを主体とする陰陽五行説に基づくもので、輪廻の思想を根幹としていたが、漢の時代に儒教や仏教の思想を取り入れるなど変更があり、最終的に確定したのが次の8帝の祭祀である。

- ① 天帝は北極星神で宇宙万物を創成した最高神
- ② 天の上帝は日神で陽の支配者であり男神
- ③ 地<sup>こうど</sup>の後土は月神で陰の支配者であり女神
- ④ 青帝は東方と春を支配し守護神は青龍<sup>せいりゅう</sup>
- ⑤ 赤帝は南方と夏を支配し守護神は朱雀<sup>すざく</sup>



⑥ 上帝と后土の子である<sup>こうてい</sup>黄帝は中央と土用を支配する天子であり皇帝

⑦ 白帝は西方と秋を支配し守護神は<sup>びやっこ</sup>白虎

⑧ 黒帝は北方と冬を支配し守護神は<sup>げんぶ</sup>玄武

前漢武帝のとき長安の西方にある<sup>せんせい</sup>陝西省において、②の上帝と④から⑧までの5帝を祀り、東方の山西省において③の後土を祀るようになったが、成帝のとき長安城の南郊に円丘を造って②の上帝を祀り、北郊に方丘を造って③の後土を祀るようになった。しかし、成帝に子供ができず効果がないとわかると元に戻している。

王莽が実権を握った前漢最後の皇帝である平帝のとき儒教や仏教の影響を受けながら、②の上帝と④から⑧までの5帝は長安城南郊の明堂に祀り、③の後土は北郊の方丘に祀る改革が行われた。

さらに、後漢光武帝のとき①の天帝を祀る泰山において、天子となる<sup>ほうぜん</sup>封禪の儀式を行うとともに、洛陽城では長安城と同様の祭祀を行い、紆余曲折のあった郊祀制度が8帝の祭祀として確立されている。

### 3 伊勢遺跡の28の建物と中国の28宿

伊勢遺跡の環溝内にある 28 の想定建物は、何を現しているのだろうか。古代の中国では天文観測によって 300 宿に及ぶ星座がつくられた。当時は大地が静止して天の星が動くとみる天動説の時代である。

同じ頃、詳細な天文観測によりヨーロッパでも神話に基づく星座がつくられた。それは多くの星をまとめた大きな形であるのに対し、中国の星座は少ない星をまとめた小さな形が多い。

また、中国では大地の中心に天子である皇帝がいるように、天の中心にある北極星には天帝がおり、そこから離れるほど星の身分は低いとする空間階級を構成していた。

図 2-3-1 28 宿の図



中国の「28 宿」とは、円形の中に月が天の赤道を公転するとき通る 28 の星座を配置し、これに陰陽五行の 5 帝を重ね合わせ、予言や占いなどの道具として使われてきたものである。

東と西が逆方向に配置されているのは、天帝が真上から

見下ろした形にしたもので、人が下から見上げた形の左右反対、つまり天空の星を鏡に映した形と同じ結果になるというわけである。

#### 4 朝貢外交と天地祭祀の伝来

中国の国史に記述はないものの、発掘された墳墓の遺物からみて、弥生中期末にあたる紀元前1世紀末葉の頃、伊都国同盟と奴国同盟は前漢に朝貢をしたとみられるが、そのときは都の長安まで行ったのではなく、楽浪郡止まりであったとするのが通説である。

ところが、前漢最後の皇帝である平帝のとき（紀元後5年）「東夷の王が大海を渡って来貢し国の珍品を奉じた」と『漢書』王莽伝にある。倭国とか倭人と書かずに単に東夷とあるため公認されていないのだが、大海を渡る東夷とは倭人以外には考えられない。

また、後記のとおりこのとき朝貢したのは、先の楽浪郡に対する朝貢で奴国同盟に勝ると認められていた伊都国同盟の王であったとみざるを得ない。

実力者王莽の発案で皇帝の郊祀制度が改革され、紀元後4年に完成をみた長安城南郊の明堂では、翌年諸王や文武

百官が参列し、初めて盛大な祭祀が行われた記念すべき年であった。朝貢した伊都国同盟の王は、漢帝国の外藩王としてこの祭祀に参加させられ、その影響を受けて帰って来た可能性が高いとみななければならない。

こうした流れからみても、紀元後 57 年後漢光武帝のとき金印紫綬を授かったのは奴国同盟の王ではなく、実績を積んで同盟から連合に拡大した伊都国連合の王であったとみられ、王もしくはその使者が都の洛陽城に行き、皇帝が行う祭祀に参列したのは当然のことであろう。

こうして得た権力的基盤を背景として中四国以東の加入クニを増やし、各クニに市場を開設するとともにさらなる東方進出を目論み、本拠地を伊都国から近江の邪馬台国に移したとみられる。

### 3章 伊勢遺跡は天地の祭祀施設

#### 1 伊勢遺跡構築の目的

伊勢遺跡に対する一般的な評価は、円形の環溝集落の中に方形の指導者居住区がある遺跡であり、数多くみられるものの一つに過ぎないというものである。

であれば、環溝の中に多くの竪穴住居があつて土器などの出土があつてしかるべきなのに、そうしたものは出土せず生活臭を感じさせないのはなぜなのか。また、環溝に沿ってほぼ等間隔の円形状に配置された祭殿の説明も不十分といわざるを得ない。

伊勢遺跡がつくられたとされる1世紀末葉は、『魏志』倭人伝によれば邪馬台国連合の発足に伴って男王が就任した時期である。弥生中期末葉から始まったとみられる気候変動は収まる気配がなく、まつりごとを行っていた指導者は、その抑制と被災の軽減化を図ることが急務となり、祭祀の道具を銅鐸・銅剣から銅鏡・鉄剣に変えてみたものの、その効果が芳しくなかったのは当然の成り行きであった。

そこで、朝鮮や中国との交流交易を強化することによって新技術の導入を図るとともに、連合王の祭祀は新たな国

づくりに相応しいものが求められ、それには東アジアの盟主であった中国から学ぶことが早道であると考えたのであろう。

かねての朝貢で積み重ねた経験と知識に加え、中国から招聘したであろう方士もしくは儒者の助言に基づき、それが構築されたと思われる。その際参考にしたとみられるのは、黄河の支流である渭水を天の川とみ、宮殿などの建築物を星座にみたてて配置し、地上に天を表したとされる秦の都咸陽かんようの例、もう一つは儒教を国教化したことに伴って長安城南郊に造られた明堂の事例があった。

伊勢遺跡のような様々な建物様式が、弥生中期に大陸から伝来したことは明らかだが、施設全体の設計配置についても、中国のこうした事例を参考にしなければあり得ないことである。

また、伊勢神宮の建物様式を神明造りといい、祖先を明神として祀る伝統的風習がある。その源流は中国の儒教に基づくもので、明堂における皇帝の郊祀や伊勢遺跡における祭祀が影響し、古墳時代の古墳に引き継がれたのだとみられる。

私は当初、伊勢遺跡建物全体の復原図を見たとき、星座を利用して神社の建物を配置した城郭が弥生時代にもあったのかと錯覚し、奈良時代にヤマト朝廷が陸奥国に造った7城の先例ではないかと色めき立ったものであった。

多賀城をはじめとする7城の周辺には、祭壇となる神社が8カ所配置され、それを結んでいくと北斗七星と北極星の形になることがわかり、そうした設計配置は都から国府に派遣されていた陰陽師おんみょうじによるもので、城の安寧と蝦夷えみしの侵略を防止するため、祈念したことによるものとの結論に至っていたからである。

図 3-1-1 多賀城にみる北斗七星と北極星の配置



①～⑦が北斗七星、⑧が北極星、名称は祭壇に置かれた

神社名で、②・③・⑥は後世に移動があったもの。星座の方角は左右反対で、この南側を西から東に古代の七北田川ななきたが流れていた。（拙著「古代東北の城柵と北斗七星の祭祀」2012年 無明社出版参照）

なお、弥生の環溝集落における環溝と伊勢遺跡に造られた二重の環溝では、形は似ていても内容が全く異なる。前者は時代が下ると防御の意味が薄れ、不要となったものや汚物を捨てるためのもので、伝染病や寄生虫の発生原あるいは伝染原となったことから、井戸を掘って利用した環溝生活は不衛生で危険なものであったとされ、多くの人々がその犠牲となっていたことが読み取れる。そのため、弥生後期になると人々は分散して住むようになり、環溝集落が戦闘のために造られたというこれまでの説は後退した。

## 2 『記紀』以前の祭祀

### (1) 伊勢の意味

伊勢遺跡における天地の祭祀は、倭国大乱後の185年頃卑弥呼が女王に擁立されたとき廃止されたものの、多くの人々がここに参拝して祈願をした時代が約100年間続いたことにより、倭人の神祀りに大きな影響を与えたことは否



定できない。その結果、社の造りの一つが神明しんめいとなり、社を建て替えて蘇みょうじんらせることが伊勢となり、祖先の神が明神となった可能性が高い。

歴史的に中国との関係が微妙な問題を抱えてきた朝鮮の王朝にあっても、国王が円丘壇を設けて天の祭祀を行うことは近代までなかったことである。ただし、儒教を国教化した7世紀の統一新羅王朝しらぎの時代、王陵の築造地を丘陵地から山麓の低地に移動し、陵墓の周りに溝を掘って近くの川から「明堂水」と称する水を引いたことは、天子の教えに従ったものだといえる。

しかし、倭国では弥生後期に天地の祭祀を行った祭壇施設が造られ、それがなぜか九州ではなく本州のほぼ中央に位置する近江と美濃であった。しかも、これらの祭祀を基本とした同盟あるいは連合の有り様は、後世に大きな影響のあったことが読み取れる。

伊勢という言葉の意味について参考となるのが金達寿氏キムタル スの見解で、氏によれば須恵器の「須江」や「蘇」が朝鮮語では鉄や固く焼いた土器を意味し、発音は「ス」・「セ」・「ソ」の中間音（子音）だというものである。

したがって、伊勢の「セ」も同系の言葉であって「イ」は接頭辞、「セ」は固いものというよりは、陰陽五行説にいう輪廻の思想に基づいた「蘇り」を表したもので、太陽であれば朝の日の出のこと、土石や鉱石であれば火熱を加えて土器・鉄器・銅器となったこと、原石であれば磨いて輝く玉となったことを表していたとみるべきであろう。

## (2) 2人王制の倭国

倭国の祭祀に関する注目すべき記事が『隋書』倭国伝にある。『記紀』編纂が始まる前の600年に倭国が遣隋使を派遣し、使者は文帝の問いに対して「倭王の姓は阿每(天)、字は多利思比孤(足彦)、号して阿輩鷄弥(大君)という。倭王は天の兄が夜明け前に政務を執り、夜が明けると日の弟にそれを譲る」と答えたところ、文帝は後段の件について「不合理なので改めるように」といって諭したとある。

この年の派遣事実については、後記のとおり白村江の敗戦処理が絡んでいて、倭国とヤマト(日本)国は同じであることがわかってしまうので、不都合とみた『記紀』が意図的に外したとみられるだけに、『隋書』の記述は重要な内容を含んでいる。即ち、当時のヤマト朝廷に仕える使者

とすれば、答えたことは白村江の敗戦や『記紀』執筆以前のことなので、真実であったことが読み取れるからである。

それによれば、倭王は男系で諱はタラシヒコであったとみられ、天神たる大兄王（『記紀』では単に「神」と記述されている）が夜明け前に祭事を行い、夜が明けると日神たる男弟王（和歌山県橋本市の隅田八幡神社人物画像鏡に記された男弟王）に政事を譲り、事実上の権力者は後者であった。そのため、二派に分かれて権力争いが絶えなかったとみられる。

後段の件が不合理な理由は書かれていないが、中国では北極星神が天帝を意味し、皇帝はその子つまり天子なので、倭王はその下にいるのだから天神でも日神でもなく東方の人にすぎないこと、さらに王が祭政一致の制度に基づく2人制であることは、混乱の元になると言いたかったのであろう。

2人王制については、傍証となる研究成果が他にもみられる。伊勢神宮が天皇家の先祖とされる太陽神のアマテラス神のみを祀ってきたことに疑いを持つ者は誰もいなかったが、吉野裕子氏は積み重ねた調査結果に基づき、北極星

神であるアメノミナカヌシ神も密かに祀ってきたことを指摘し耳目の驚きを誘った。このことは大兄王の守護神が北極星神で、男弟王の守護神が太陽神であったことを見事に立証したことにほかならない。

『魏志』倭人伝に卑弥呼女王の王宮にただ一人の男弟が出入りしているとあるのは、実弟という意味ではなくて実権者である男弟王のことを指し、5世紀に中国の南朝に朝貢した応神王朝の五王も男弟王であって、応神帝・履中帝は同時期の大兄王であったと私はみている。

2人王制は少なくとも飛鳥時代の600年まで続いていたのだから、古来1人制だとする『記紀』伝承からみれば、同時代の王の古墳数は単純にみれば約2倍になる勘定である。したがって、『記紀』では時代を2倍に膨らませて遡及させたのではないかとの疑いが出てくる。

やまとたけるのみこと

日本武尊や聖徳太子が実は男弟王だったということもあり得るので、私は2人の王の交代がどのように行われたのか解明を試みたが、未だに不明のままである。

隋文帝は陰陽五行思想の発祥地である中国こそが大地の中央にあるのであって、その地にいる皇帝（天子）は天帝

の命を受けた唯一無二の存在であることを強く使者に求めたことがうかがえる。

### 3 朝鮮半島における鉄の争奪

#### (1) 崇神帝の時代

3 世紀後葉の崇神帝から始まる古墳時代となって、ヤマトは邪馬台国時代の緩やかな国家連合をより強力なものに改めるため、将軍を四道（北陸・東海・西海・丹波）に派遣した。

その目的を具体的な施策でいえば、中央政府に必要な政事・軍事・古墳造成の三部門に要する物資や労役を整えるため、地方首長に対し徴税を賦課するためである。さらに、制度を確実に担保するため、地方の主要大首長を大和に居住させ連合王を補佐させた。これはある意味人質を求めたともいえよう。

こうした改革の背景にあったのが、朝鮮半島の弁韓・辰韓にあった鉄資源を巡っての争いである。2 世紀後葉に卑弥呼女王を共立した邪馬台国連合の多数派が弁韓・瀬戸内海ルートに与し、少数派と狗奴国同盟は辰韓・日本海ルートに与したとみられ、深刻な対立状態に陥った。

3世紀後葉に中国の支配が弱体化すると大国の扶余・高句麗こうくりが南下し、クニ連合の4者（馬韓・弁韓・辰韓・倭国）の勢力争いに割って入る複雑な争いを繰り返すこととなる。

『書記』崇神帝7年に、三輪山みわやまの大物主神おおものぬしが「吾子の太田おおた田根子たねこに吾を祀らせれば、立ち所に国は治まり、海外の国も自ら降伏するだろう」とあり、海外との交易は決して平和裏に行われていたわけではなかった。

## (2) 仲哀帝・神功皇后の時代

中国が撤退した4世紀中葉になると高句麗・百済・新羅・加羅・ヤマトの争いとなり、後葉には高句麗・新羅同盟と百済・加羅・ヤマト同盟の対決となった。

この同盟に寄せて神功じんぐう52年百済からヤマトに贈られたという「七支刀しちしとう」は、奈良県天理市の石上神宮いそのかみが所蔵しており、その表裏に金象嵌きんぞうがんの銘文が刻まれている。

それによれば、369年（泰和4年とあるのは太和たいわの誤り、朝貢した東晋の年号を使っていた）の制作で、372年近肖きんしょう古王こ（346～375年）がヤマトの仲哀帝ちゅうあいに贈ったものとみられる。

また、414年制作の高句麗好太王碑こうたい（別名では広開土王

碑)によれば、当初は百済同盟が新羅同盟を圧倒していたが、4世紀末葉から5世紀初頭になると逆転している。同時期のヤマトでは仲哀帝が長門・筑紫に下向して指揮をとったが亡くなったとある(暗殺されたとみる識者が多い)。

おそらく、海を隔てたヤマトにとって長期にわたる軍兵の派遣や武器兵糧の調達は大きな負担となり、徴発された多くの兵士と南朝鮮にあった倭人の領地を失い、国内の首長が反発して連合国家は分裂状態となったのであろう。その後起きた香坂王・忍熊王(仲哀帝の皇子)の乱は、崇神王朝大和佐紀勢が応神王朝河内勢に敗れた史実とみられる。

ところが、神功紀伝には上記の史実に、3世紀の邪馬台国連合の女王朝貢が合作されている。多くの説は女王を皇后と勘違いしたからだというのが、引用している『魏志』と『起居中』があれば、二人の女王は年代の異なる別人であることが明らかなので、そうした説は成立し得ない。

合作架上の真の目的は、倭とヤマトは当初から別の国であったことを明らかにするためであった。つまり、『記紀』はあくまでも本州にあるヤマトの国史であって、九州にあった倭の国史ではないという言い分を立てるためであり、

これには次章で取り上げる白村江の敗戦が絡んでいる。

### 3 火見の監視所と灯火連絡網

図 3-4-1 近江の監視所・灯火場・烽火場



唐・新羅同盟軍との戦いを指揮するため、斉明女帝や中大兄皇子などの皇族が難波津から九州に向かう記録をみると、潮汐の干満差が激しい瀬戸内海において、当時の舟はその加減を見ながら夜間に航行していたことがわかる。

定期的かつ広域的な交易を既に確立していた弥生中期後



半において、瀬戸内海をはじめとする沿岸海洋を航行した舟も同様であったと考えられ、安全を期すには各地に<sup>たいまつ</sup>松明を灯火する灯火場が必要であった。

弥生後期になるとこの仕組みは舟の航行のみならず、遠隔地を結ぶ連絡手段にも利用され、さらに好天の昼間に行<sup>のろし</sup>う烽火が加わり、連合の盟主がクニを従えて君臨する命綱となっていたことがうかがわれる。

灯火場・烽火場は展望の良好な丘陵地の上に竪穴建物を構え、ここに常時必要な材料を保管し、<sup>ひみ</sup>火見（表記は日見）という監視所の指示があれば下方にある居住集落から駆けつけ、夜間の灯火や昼間の烽火をもって遠隔地に連絡を行うもので、その“灯火連絡網”が<sup>ひえ</sup>火枝（表記は日枝、比叡）である。

近江では弥生中期末葉の高峰遺跡（大津市 標高 167m）・後期中葉の新池北遺跡（大津市 標高 153m）があり、四方の眺望が良好な<sup>だいひえ</sup>大比叡（標高 848m）にあったとみられる火見の監視所の指示によって灯火や烽火を行い、邪馬台国内のみならず他国にも連絡をしていたとみられる。

大比叡は日吉大社発祥の地との伝承があることからみて、

その役割を担っていたのは山王日枝族<sup>さんのう ひ え</sup>で、北九州にある比<sup>ひ</sup>恵<sup>え</sup>遺跡や日吉神社（福岡市博多区）と繋がりがあったと推定され、その実態は鍛冶族であろう。

この点について参考になったのが、7、8世紀のヤマト朝廷に抵抗した陸奥国<sup>えみし</sup>の蝦夷の事例で、西日本から移動してきた鍛冶族を主力とする彼らは、主要な山頂に監視所を設け、灯火や烽火で連絡する戦術を得意とし、それが火高見<sup>ひ たかみ</sup>（表記は日高見）という国名にもなっていた。

また、近江に隣接する美濃の狗奴国の例からみれば、監視所・灯火場・烽火場のある高い丘陵地に連合王の墓地が造られたと予測されるので、比叡の丘陵地にある峰々は要注意である。

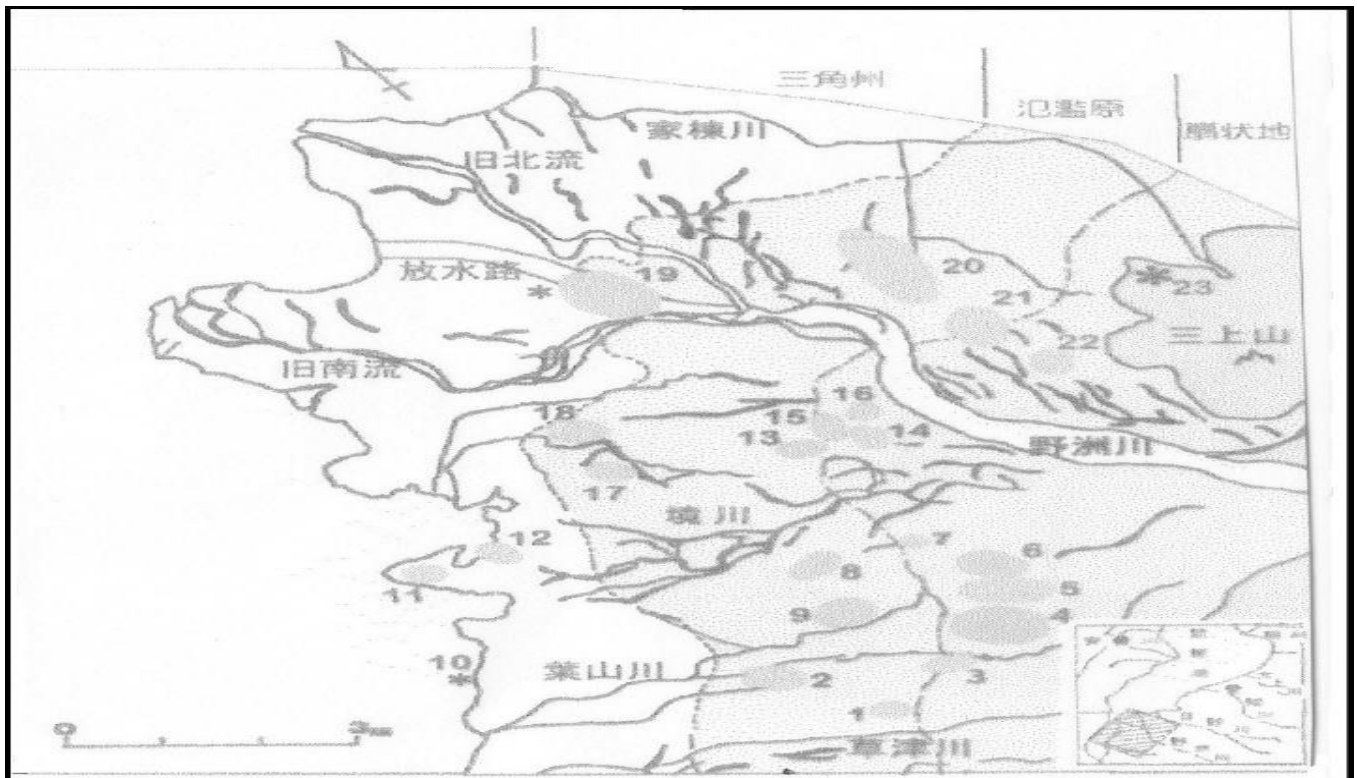
ところで、今の考古学では丘陵地にある監視所・灯火場・烽火場のみならず、季節風を利用した炉のある工房、洪水を避けるため低地から移動した集落などをひとまとめにして高地性集落と名付けているが、私はこのことに疑問を感じる。

高いところにあるから何でも高地性集落というわけではない。監視所であれば常在し、交代で見張りを行うことに

なるので下方にある集落の支援を必要とするが、それでも工房を設けて働くとか食糧確保のため狩りを行うなどもあったとみるべきである。

## 5 倭国大乱前にいた男王の王宮と王墓

図 3-5-1 野洲川下流域の遺跡



- 1 門ヶ町 2 宮前 3 中沢 4 **下鈎** 5 野尻  
 6 **伊勢** 7 山田町 8 **下長** 9 霊仙寺 10 志都湖底  
 11 烏丸崎 12 小津浜 13 **下之郷** 14 二ノ畔・横枕  
 15 **酒寺** 16 **播磨田東** 17 赤野井浜 18 寺中  
 19 **服部** 20 八天 21 市三宅東 22 下々塚 23 大岩山  
 注) 太字は拠点・中核・重要 □は広域拠点 \*は銅鐸出土

～は河川・旧河川

図 3-5-2 男王の王宮・王墓想定



次に、伊勢遺跡があった当時の邪馬台国連合の場合、男王の王宮と王墓がどこにあったのか推測をしてみよう。先にみたとおり、広域的な交易拠点が下長遺跡にあったことからみれば、ここから近い場所にあった。また、漢の長安城は明堂の真北にあったことをみれば、伊勢遺跡の真北にあった可能性が高い。

その場所は二ノ畔横枕、酒寺、播磨田東のいずれかの遺跡とみられるが、王が住む小環溝とみられた酒寺の可能性が高く、卑弥呼の時代と違って質素なものであったと推

定される。

火見の監視所があった大比叡は王宮の真西となることから、王墓は大比叡の東側の丘陵即ち坂本の辺りと想定されるが、大方は開発し尽されているので破壊された可能性が高いとみられる。

## 4章 7世紀のヤマト政権が隠した倭の邪馬台国

### 1 白村江の敗戦と講和交渉

3世紀後葉以降ヤマトはたびたび朝鮮に出兵していたが、7世紀になると中国の隋・唐が再び朝鮮支配に乗り出し、唐は新羅と組んで百済・高句麗・加羅を攻めた。

ヤマトは敗れた百済を再興し、高句麗と加羅を助けるため斉明女帝と中大兄皇子は九州に下向して戦いに備え兵を派遣したが、663年白村江の戦いで唐の水軍に大敗した。

斉明女帝は九州で亡くなり（暗殺されたとみる識者が多い）、西国から徴発された多くの兵士と南朝鮮にあった倭人の領地を失い、従った首長らの反発から連合国家が分裂状態となったことは、仲哀帝の敗戦と瓜二つである。

白村江の敗戦処理については中国側にも日本側にも詳しい記録は残されていないが、多くのヤマト兵が現地に捨て置かれ捕虜となった。当然のことながら、唐はその処遇や戦争の責任をどうするのか交渉を求めたのであろう。

665年唐は水軍を北九州に派遣し、和戦両様の講和交渉を行った結果、ヤマトは本州への侵攻を防ぐため、出兵したのは九州の倭国であって本州のヤマト国ではないと主張

し（発案者は藤原鎌足ではないか）、唐は倭王（671年に帰国を許された筑紫君薩野馬）が封禪の儀式（支配地が拡大したことに伴い666年高宗が泰山で挙行）に参列すること、つまり属国となることと引き替えに、それを受け入れたとみられる。

この結果、朝鮮半島と倭国（九州）は唐の支配下となったが、676年唐が朝鮮半島を放棄して新羅が統一を果たしたとき、倭国は唐の属国ではなくなったのであろう。

一方、ヤマトの中大兄皇子は国家分裂を防ぐため、律令国家の実現とナショナリズムの確立に奔走し、天皇即位を長く固辞し続けた。

## 2 『記紀』の編纂

671年天智帝が亡くなり、翌年壬申の乱が起きて大海人皇子勝利し、天皇に即位してから『記紀』編纂の命が下っている。

先述のとおり、神功皇后のとき倭の二人の女王が中国の魏と晋に朝貢したとあり、女王が倭の邪馬台国の卑弥呼と壺與であることは明らかだが、皇后はヤマト国のひとなので、朝貢した倭とは別の国ということになる。

したがって、『記紀』はあくまでもヤマト国の正史であって、倭国のものではないということになる。同紀伝に「倭の女王」と国名を付記したのはそのため、この場合「倭」はワと読むべきでヤマトと読むべきではない。自国の女王が朝貢したのであれば、他国史を引用した伝聞形式とするはずもないからである。

注) 『記紀』にある倭・倭国・大倭国・大倭・日本をヤマトと読ませる場合は、その旨の注記がある。

倭に関するこうした『記紀』の注意深い編纂方針をみれば、邪馬台国が本州にあったことの正確な伝承が、飛鳥時代にあったことを示したといえる。

だが、勝者の唐に対する弁明の手前、朝貢した倭の女王墓が本州にあってはならず、改葬などによってひた隠しの工作をしたことが予想される。さらに、魏が授けた金印・銀印・銅鏡など様々な遺物は、その痕跡を消すため廃棄されたのではないか、近江遷都もそのためではなかったのかとさえ思える。

この主張に疑問を持った唐は、後年に使者を日本に派遣してその真偽を確かめたとみられ、『新唐書』ではこのこ



とが修正されたものの、その王は 32 代にわたって奴国の筑紫城つくしにいたが、神武帝じんむのとき大和州やまと（本州）に遷ったとしている。

『記紀』を参照して見解が変わったことは明らかで、なぜ日本国史を漢文調で記載したのかという疑問も氷解する。こうした経過を知ってか知らずにか、邪馬台国九州説の論者が、倭国九州説を有力な根拠としていることは皮肉というほかない。

注) 『魏志』倭人伝にある倭国の方位と里程

- ① 帯方郡ピョンヤン（平壤市または京城市付近）  
ソウル ↓ 南へ → 東へ（海路 7000 余里）  
キムヘ ↓ 南へ（海路 1000 余里）  
つしま ↓ 南へ（海路 1000 余里）  
いき ↓ 南へ（海路 1000 余里）  
まつら ↓ 東南へ（500 里）  
伊都国
- ② 伊都国 ↓ 東南へ（100 里）  
東へ → ふみ（100 里）  
南へ ↓ つしま（水行 20 日）  
南へ ↓ 南へ（水行 10 日または陸行 1 月）  
南へ ↓ 南へ（帯方郡 12000 余里）

不弥国以降の南が東の誤りであることは多くの先人によって指摘されてきたところだが、里程についても明らかに異なる。帯方郡から北九州市方面にあったとみられる不弥

国まで 10700 里（1 里は 430m 余なので 4600 km 余）とあるのは過大すぎる。実際には 2300 里（1000 km）弱であるから、同郡から邪馬台国まで 12000 余里（5100 km 余）というのも過大になる。

松本清張氏によれば、中国では砂漠を渡った遙か遠い国であることを表現するのに、萬 2 千里という里程が慣用的に使われていたという（『漢書』西域伝・『魏志』鮮卑伝）。したがって、大海を渡った遙か遠い国であることを示したにすぎないのであって、実距離とすることは適切ではない。

一方、不弥国から邪馬台国までは計算上 1300 余里（500 km 余）となるが、なぜか所要日数で示して里程を知らない倭人式にしてある。これはおそらく、韓や北九州の地は漢の時代から郡県支配下の属国であったため国内扱いとして里程換算をし、その先の支配外地とは区別したからだと思われる興味深い。

ところが、対する倭人もしたたかなもので、連合王と同盟王が北九州から本州に東遷して天地の祭祀を行った。即ち、中国の郡県支配体制から脱却した後に、九州の国々を逆に属国とする自立の意図を当初から有していたとみられ

る。

所要日数の妥当性を調べるため、平安時代中期成立の延喜式（927年）主計寮上にある瀬戸内海路の所要日数をみると、長門ながとから備前びぜんまで14日、備前から平安京まで9日となっているが、これには往路説と往復路説がある。

北九州の不弥国から備前津島の投馬つしま国まで水行20日、投馬国から近江の邪馬台国まで水行10日という日数は、往復路とみれば延喜式と概ね合っている。なぜなら、投馬国から邪馬台国まで陸行1月という日数は、街道の整備や川の渡し舟が整備されていない時代の往復路とみれば理解できるからである。

## 5章 瑞龍寺山古墳群は火見の王墓

### 1 濃尾平野の弥生後期遺跡

図 5-1-1 濃尾平野の弥生後期遺跡群



近江の野洲川下流域が弥生遺跡の銀座というのであれば、もう一つの銀座が濃尾平野にもある。濃尾平野を流れる木曾川・長良川・揖斐川が谷間から平野に出た標高が6、7mの扇状地の末端周辺は一大湧水地帯で、弥生後期の遺跡が目白押しである。

美濃でいえば今宿・荒尾南・檜・<sup>ひがしちょうだ</sup>東町田の遺跡（以上大

垣市)などで、中でも荒尾南の方形周溝墓の溝から出土した壺には、82本の<sup>かい</sup>櫂を持つ大型船の線刻画が出土し大きな話題となった。銅鐸や土器に描かれた櫂で舟を漕ぐ図について、一般には祭りの風景だとか、南方から倭国に來た先祖の姿を描いたなどの誤解がみられる。

古墳時代の木棺の中に舟形をしたものがみられるように、舟を使って交易に携わった指導者の靈魂を、来世に送るための葬送の儀式であったことに思いを馳せるべきである。そのため木棺を舟に載せ、川や湖を渡った所にある墓地に埋葬することがあったとしても、壺に書かれた大型舟は天に魂を送るという想像上のものであったことが理解できるであろう。

一方、尾張においても集落は低地から高地に移動し、大湧水地帯であった八王子・北川田・山中などの遺跡がある萩原遺跡群（以上一宮市）には、集落と墓域の遺構が数多くあり、その大半は未調査となっている。

## 2 瑞龍寺山頂墳と旭見ヶ池町

集落には墓域が付きもので、一般の墓は弥生前期以来の周溝墓であるが、後期中葉の2世紀前半とされる西上面遺にしじょうめん



跡（一宮市）から、全長 40.5m の大型で平地に盛土を高くした前方後方形の墳丘墓が出土した。

しかし、連合や同盟の王墓ともなると話は別で、集落に近い平地ではなく標高が 100m 以上の丘陵山頂に造られ、そうした動きは近江盆地と濃尾平野に限定されるという比類のない造墓形式が現れる。

図 5-2-1 瑞龍寺山頂墳所在地



標高 156m の山頂に造られた瑞龍寺山頂墳（岐阜市）はいわゆる塚墓であり、赤塚次郎氏は狗奴国の初代王墓の可能性を指摘している。岐阜市の北東から南西に流れる長良川の左

岸に金華山丘陵があり、その南西端に瑞龍寺山がある。JR

岐阜駅から北北東に 3.5 km の地点である。

図 5-2-2 瑞龍寺山頂墳



この墓は自然の山を利用した典型的な塚墓であり、戦前からこの周辺

の墳墓を調査した小川栄一氏によれば、西側の尾根にも 5 基あったものの遊園地の造成ですべて破壊され、南西から南東にかけての尾根には 16 基があるという。

瑞龍寺山頂の中央に並ぶ岩の右側が第 1 埋葬地で左側が第 2 埋葬地、1977 年の調査では突出部付き方墳とされたが、前方後方墳とする見方も出され、時期は 100 年前後とされる。後漢の内行花文鏡ないこうかもんと新が発行した通貨の貨泉かせんが山中式土器とともに出土した。

この山頂墳の東側に、旭見ヶ池町ひみがいけという注目すべき地名

がある。「ヒミ」とは卑弥呼女王や対立した卑弥弓呼（弓は弼の略字とみた）男王、あるいは馬韓の卑弥国に使われた言葉と同じとみられ、その意味については様々な見解があるものの、私は太陽信仰の観点から「日見」ではないかと思っていた。

ところが、7、8世紀のヤマト朝廷に抵抗した陸奥国の蝦夷は、関東や北陸から北上してきた鍛冶族が主体で、火高見（表記は日高見 北上はその転訛）という国をつくっていた。国名の由来は、彼らが遠隔地連絡の手段として灯火・烽火を使い、それを監視する場所を各地に設けていたことからきたものとみられる。したがって、「ヒミ」とは監視所である「火見」だとする説が正しいことは、先にも指摘したとおりである。

当時の連合王や同盟王は鍛冶族であったとみられ、鉄の資材をいかにして手に入れるかが最大の使命で、それには北九州から始まる灯火・烽火の連絡が必要不可欠のものであったろう。古墳群のある金華山や南宮山の丘陵は四方に展望が開け、その監視に適した場所となっている。

金華山で火見の監視を行っていたのは、丘陵にある



い な ば ほ ぁかりの  
井奈波神社あるいは真清田神社（一宮市）の祭神が火 明  
みこと にぎはやひ もののべ  
命、別名では饒速日神であるから物部である。

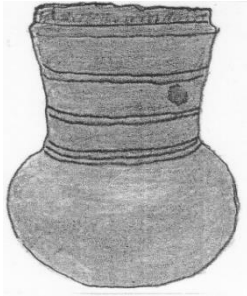
一方、南宮山丘陵の場合は濃尾平野から出土した墨書人  
めん ぼくしょじん  
面土器が備讃地域と共通のもので、南宮は吉備きびと関係があ  
ることから、担っていたのは鉾山の神である金山彦神かねやまひこの南  
宮族とみられ、邪馬台国連合が卑弥呼を共立した以降は、  
その争いに敗れた山王日枝族が南宮族に取って代わったと  
みられる。

このような観点かからこの古墳を見直してみると、単に  
支配地の見える高いところに墓地を設けたとする考え方は、  
同盟王や連合王の場合当てはまるものではない。北九州か  
ら山陰、北近畿を経て西東海に至る日本海ルートの監視所  
と“灯火連絡網”を束ねていたことによるもので、天孫族  
の異名を有する彼らの墓地がクニの王より一段と高い場所  
に造られたのは当然のことであった。

また、小川氏が集めた土器の中に、明治42年に瑞龍寺山  
頂墳から出土した加耶式直口壺かやしきちょうこうつぼを譲り受けたとの記録が  
ある。出土を証明する確実なものはないものの、これが正  
しいとすれば、倭国大乱前の奴国や狗奴国の王は物部に属

する鍛冶族で、加耶即ち弁韓からの渡来人系とみることができる。

図 5-2-3 加耶式直口壺 (小川コレクションの模写図)



高さ 19.5 cm・胴径 15 cmの日本では出土例が少ない黒色の壺である。さらに、同氏は戦国時代に岐阜城が金華山に造られたとき、多くの墳墓が破壊された可能性についても言及していることからみて、この丘陵一帯には狗奴国同盟の王墓が数多くあったのではないだろうか。

## 6章 象鼻山上円下方壇は天地の祭祀施設

### 1 上円下方壇の設置

図 6-1-1 象鼻山古墳群所在地



1996～2007 年にかけて調査が行われた<sup>ぞうびさん</sup>象鼻山古墳群は、岐阜県南西部の南宮山丘陵の南端にあり、標高が 142m で養老町と垂井町にまたがる遺跡である。72 基の古墳群は 2～

7 世紀にかけて造られたとされ、その多くは 2 世紀後葉と 5 世紀後葉に分かれる。

通常、首長墓の古墳群であれば特定時期に集中して造られることはないはずだが、戦いによって多くの者が死んだことによるものであろうか。2 世紀後葉は倭国大乱であり、5 世紀後葉は反抗する各地の豪族を倒した雄略帝の時代で、

伊勢に勢力を有していたとされる朝日郎と物部軍が、474年に伊賀で激戦となったことが考えられる。

この地は古来、伊勢の勢力が強かったところであり、赤塚次郎氏が卑弥呼と対立した狗奴国王の墓とみる1号墳（前方後方墳）は3世紀中葉とされるが、本拠地が美濃ではなく、水銀朱を特産としていた伊勢の可能性も否定はできない。

丘陵に近い平野部の日吉遺跡は古墳群を造った人々の集落で、多くの土器が出土した場所は当時の牧田川の川岸にあり、洪水と干ばつの防止を祈願した水辺の祭祀を行っていたとされている。

私が注目したのは日吉（元は日枝）という地名で、いわゆる山王日枝族がこの丘陵で灯火・烽火の監視を行っていたのではないか、だとすれば1号墳に埋葬された王とは倭国大乱前にいた邪馬台国連合の男王の系統であつたいえる。

特に注目されるのは上円下方壇という特異な形をした3号墳で、古墳群の中では最も古い2世紀中葉つまり倭国大乱前に築造されたと目され、墳墓ではないことから謎の多い古墳とされているが、中国の天円地方を形象にしたとの

見解が出されている。

拙著「邪馬壹国からヤマト国へ」（2015年サンライズ出版 以下「前著」という）で指摘したように、この地は本州のほぼ中央に位置する場所、つまり西の長門ながとから東の上総かずさに至る距離のほぼ中間にあることを築造者は把握しており、正確な方位や天文の観測を得意としていた可能性が高い。

図 6-1-2 上円下方壇（象鼻山 3 号墳）



造成時期は伊勢遺跡より後で倭国大乱の前であるとされるが、天円地方を模したとみれば中国の天壇・地壇を参考にし、狗奴国同盟が邪馬台国連合

の伊勢遺跡に対抗するため、天地の祭祀を行っていたとみるのが自然で、赤塚次郎氏の説は妥当なものであろう。

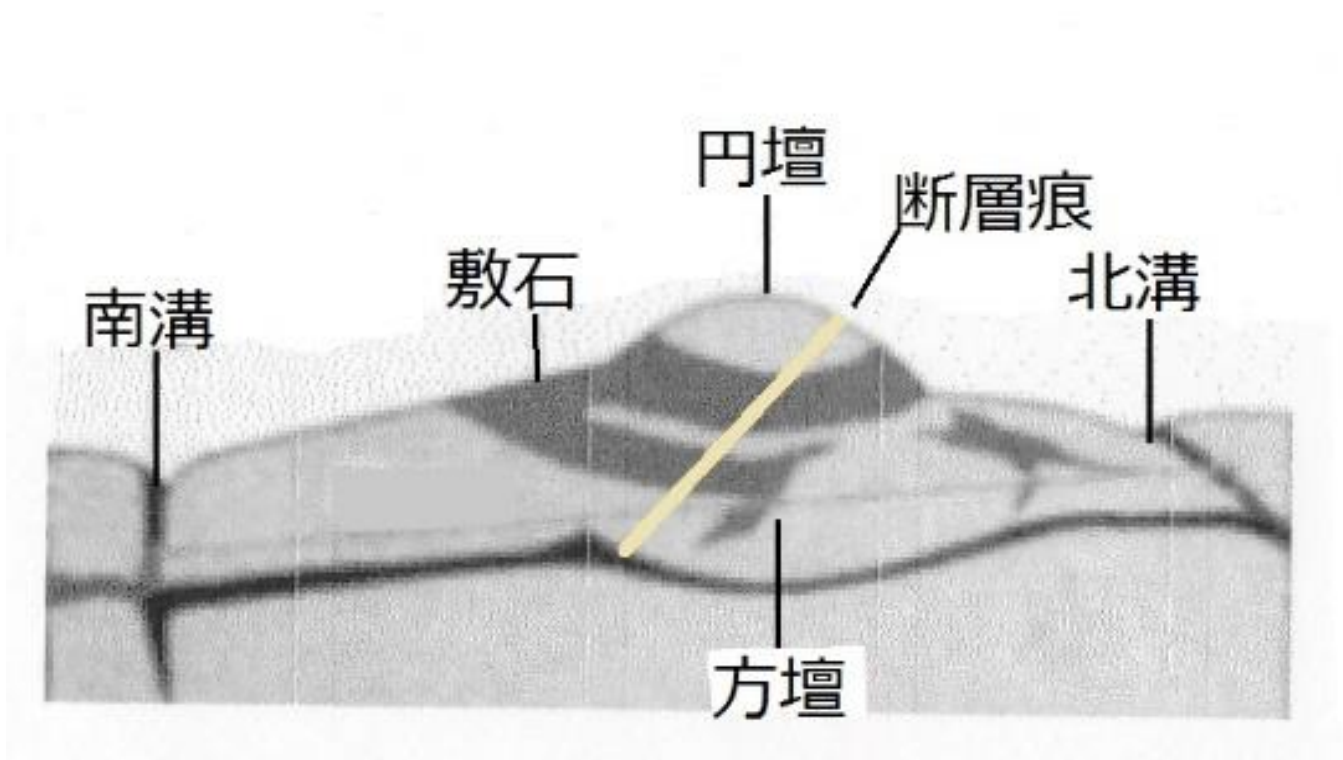
なお、『漢書』王莽伝によれば前漢末期のころ中国西部の陝西省において、天壇と地壇を合わせた円丘方丘形の白



い石に、「王莽を皇帝にすべし」と朱書されたものが見つかったとあり、これに乗じて王莽が皇帝に就いたことを知っていたとも考えられる。

## 2 弥生遺跡に残された大地震の爪痕

図 6-2-1 上円下方壇断面見取図（養老町教育委員会資料）



上円下方壇の上表には、大地震の痕跡を示す断層が地表に現れていることから、大地震は明らかにこの古墳が築かれた後に起きたもので、関ヶ原断層帯の活動によって2世紀後葉に起きたと推定される。

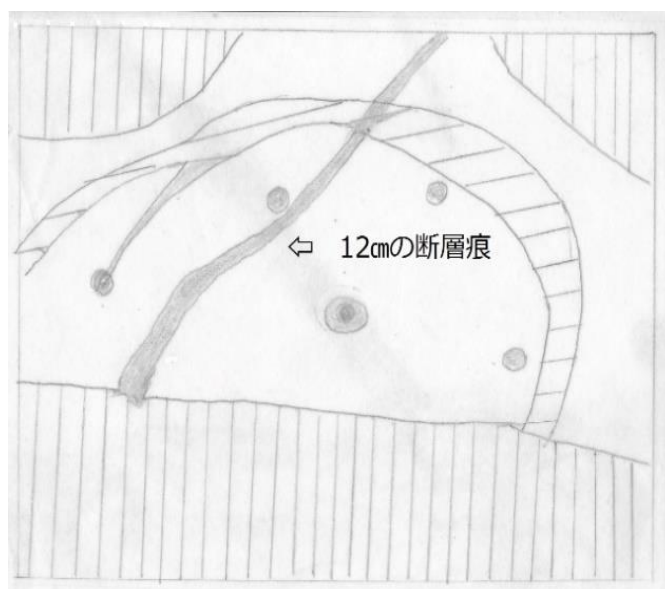
同じころ、淡路島を震源とする大地震もあって近畿・東海が二大地震に見舞われるとともに、天候不順の追い打ち

があって大飢饉に追い込まれた可能性がある。その結果、食糧争奪や王の殺害が起きて倭国大乱（178～184 年頃『魏志』倭人伝にある桓帝・霊帝の間）となり、修復に7年を費やした後に卑弥呼が女王に擁立された（185年頃）と私はみている。

山頂を削って平らにした上に、80m×70mの石積方形壇を築き、その上に石積と盛土による直径17mの円壇が置かれている。その北側と南側の溝は、後から掘ったものとおかった。また、円壇の北西から南東にかけて大地震の痕跡とみられる断層が表面に現れている。

図 6-2-2 塩壺遺跡所在地

図 6-2-3 塩壺遺跡の断層痕



注) 図 5-5 は兵庫県立考古博物館資料の模式図

また、明石海峡大橋から淡路島に渡り、最初のインター

チェンジの中に塩壺遺跡（淡路市）があり、弥生後期後葉に営まれた竪穴住居の中から、段差 12 cm の断層の爪痕が残っており、北東から南西に延びている楠本断層を震源とする大地震のあったことがうかがわれ、断層が地表に現れるのは震度 7 クラスの規模だという。

### 3 2 世紀後葉の気候変動

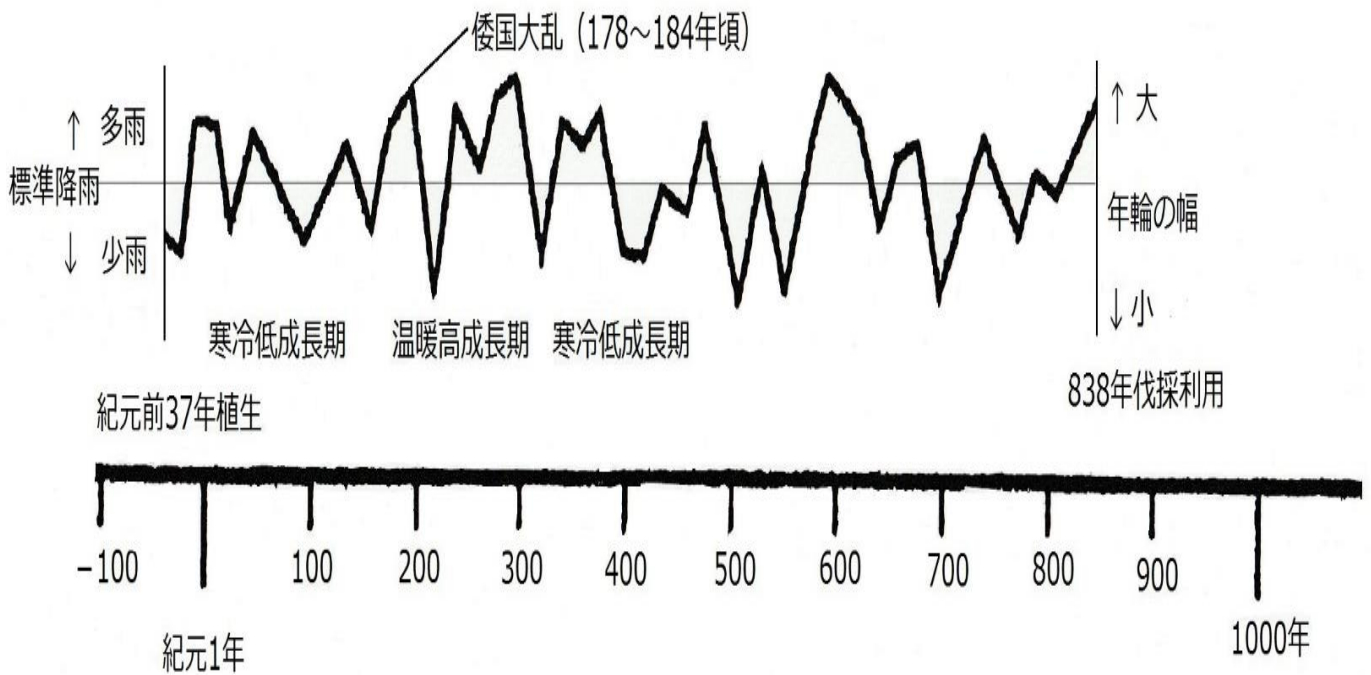
倭国大乱の頃、気候にも大変動があった可能性を示すものとして、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターが、ヒノキの年輪から歴年標準パターンを得るために用いた奈良平城宮跡出土の材があり（1988 年埋蔵文化財ニュース 59）、その変化は次図のようになっている。

畿内産とみられるヒノキ年輪の経年的変化は、グラフの上方が多雨のため年輪幅が大きく、下方は少雨のため年輪幅が小さくなっている。これによれば、紀元前 1 世紀頃から紀元後 2 世紀中葉までは寒冷化気候により年輪幅が相対的に低く、2 世紀後葉から 3 世紀後葉までは温暖化気候により高くなり、古墳時代となる 4 世紀から 6 世紀中葉までは寒冷化気候により再び低くなることがわかる。



## 図 6-3-1 ヒノキの年輪幅にみる気候変動

○ 奈良の平城宮址から出土したヒノキ年輪の経年変化



注) 年縞の出典

「わが国における古年輪学の現状」(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 1988年)

したがって、倭国大乱の頃は温暖かつ多雨であったとみられることから、洪水が頻発していた可能性が高いのに対し、その後は温暖ではあっても急激に少雨となって干ばつが続いた可能性が高く、その変化は極めて激しいものであったことを表している。

こうした気候の激変は飢饉をもたらし、大地震の襲来が人心の不安定化を増幅したとみられる。このことは事実上

中国の植民地で、倭国との交易で潤っていた楽浪郡の経済に大打撃を与え、多くの郡県人が韓へ逃亡する事態となり、<sup>かん</sup>韓・<sup>わい</sup>濊が強盛となって郡県の統制が効かなくなったという『魏志』にある後漢末期（桓帝・靈帝の間）の記事と一致する。

また、邪馬台国連合が終焉を迎えてヤマト連合が発足した3世紀末葉にあつては、温暖多雨から寒冷少雨に移行したことがうかがわれ、大和から始まった前方後円墳の造成に伴う溜池<sup>ためいけ</sup>築造は、理にかなったものであったといえよう。

#### 4 壺與女王が上円下方壇で祭祀

『晋書』によれば泰始2年（266年）11月「倭人が来て貢物を献上した。円丘方丘に二郊（南が郊・北郊）を設け、二至（冬至・夏至）の祀りをここに合わせて行っている」とある。

晋武帝に朝貢したのは卑弥呼の後継者であった邪馬台国連合の壺與<sup>いちよ</sup>女王で、円丘方丘とは他に類例のない象鼻山の上円下方壇のこととみられる。南溝（南郊）・北溝（北郊）は、天子の祭祀に準じたものであることを明確に表すため、新しく造ったとみられるものの、対立していた狗奴国の地

でなぜ行うことができたのかという疑問が生ずる。

おそらく、狗奴国同盟の王であった象鼻山1号墳の被葬者が亡くなったとき和解が成立して連合と同盟の統一を果たし、二至二郊の祀りを朝貢において報告したものであろう。その結果については何も書かれていないが、天子の権威を侵す祭祀として不興を買い、失敗に繋がったのではないだろうか。

## 7章 交易の窓口となった伊都国

### 1 前漢時代

図 7-1-1 伊都国の遺跡



伊都国については国名の問題があるにせよ、糸島は前漢時代から朝鮮半島に開かれた交易の窓口で、長崎の出島のような役割を果たしていたところであり、中国人と倭人の商人が取引を行うためいち早く前漢に朝貢をし、王莽の新・後漢・遼東の公孫・魏になってもその立場は一貫したものであったとみることができる。

ただし、このことは国家主導で行われた交易に限定され



る話しであるから注意が必要である。武末純一氏らが指摘しているように、当時の交易は三層構造をもって行われていたのである。即ち、①沿岸漁民による交易、②沿岸商人による広域的取引、③国主導の国際取引に区分され、数量的に最も多いのは②で、質的に優れていたのは③とみられ、『魏志』倭人伝にあるクニごとにつくられた市場のネットワークがその要になっていたものと思われる。

図 7-1-2 奴国の遺跡



おおいちおう

大市王である連合王の役割は、各クニにある市場に管理責任者である大市（律令時代の市司）や武人を派遣し、取引の安定かつ安全を確保することであって、自らが高価な交易品をせしめることにあるわけではない。

また、被災地や戦鬪で負けた地域の住民を広域的な観点から適地に誘導することも重要な仕事である。仮に、邪馬台国が九州南部にあるとすれば、はたしてこれらの仕事が可能であろうか。

したがって、鉄器・銅器・ガラス製品・中国の通貨・硯面<sup>すずり</sup>といった高価なものの遺物は、取引が盛んな各クニの市場周辺から出土するのは当然のことだが、連合の都があった邪馬台国には加盟クニを上回るものがあるはず、との宝探しの的は全く的外れの見方となる。

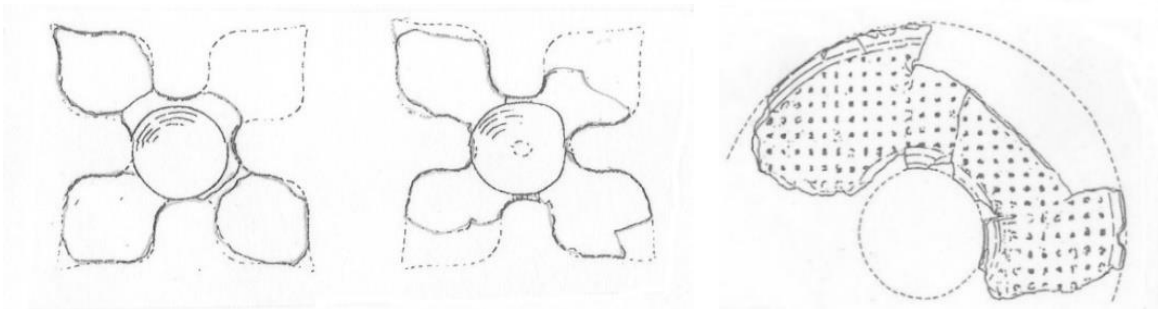
加入クニや市場の不正を監視し取り締まるには、為政者としてそれなりの自律を必要とするからで、連合とはどのような役割を有していたのかという認識に関わる問題でもある。

一方、中国とすれば島国である倭国から海産物や珍品を入手することは魅力的であったとみられるが、安定的な取引を行う前提として倭国王が漢の皇帝に朝貢を行い、臣下となることを約束すること、つまり冊封体制<sup>さくほう</sup>に入ることが必須の条件であった。

その要請に応えるため、当時 100 余のクニが林立してい

た倭国では、急きよ連合国家を組織して代表者である連合王を定める必要に迫られた。このことからして、倭国におけるクニ連合の繁栄と衰退は、中国における帝国の拡大あるいは縮小と一体的なものであったことがわかる。

図 7-1-3 四葉座金具とガラス璧（福岡県教育委員会資料）



先述のとおり、奴国（春日市須玖岡本遺跡<sup>すぐおかもと</sup>）の王墓からガラス璧<sup>へき</sup>が、同じく伊都国（糸島市三雲南小路遺跡<sup>みくもみなみしょうじ</sup>）の王墓<sup>しょうぎ</sup>から四葉座金具とガラス璧が出土し、いずれも前漢末期の朝貢によって得たとみられる。

出土物からみて伊都国を優遇したことは明らかだが、それにしても隣接する二つの同盟に外交権と交易権を与えたのはなぜであろうか。前漢の外交政策は「夷狄<sup>いてき</sup>をもって夷狄<sup>きょうど</sup>を征す」であり、匈奴のような強大な外藩国は分裂させ、支配を容易にするというものであったから、倭国が100余のクニから成る大国であることを知り、あえて行われたも



のだと解される。

三雲南小路方形周溝墓出土の四葉座金具（木棺の飾り）は、前漢の楽浪郡に朝貢して得たものとされ、死んでも皇帝の臣下であることを誓約する、つまり冊封体制に入ったことを約束した証となるものであった。

注) 四葉座は蓮の花を表したとされることから、「四弁<sup>しべん</sup>花座<sup>かざ</sup>」というべきとの意見がある。

なお、璧<sup>へき</sup>は天を表す象徴として皇帝が臣下に授けたもので、『魏志』扶余<sup>ふよ</sup>伝には王が伝世の玉璧を有しているとあり、玉製の方がガラス製より上であったとみられる。

## 2 後漢・公孫時代

伊都国同盟は連合に拡大して 57 年に光武帝から金印紫綬を受け、唯一倭国の代表国と認められた可能性が高い。加入クニへの市場開設事業と相まって、交易の拡大と安定を狙ったその効果は大きく、中四国以東の加入クニが一気に増加したとみられる。

また、洪水被災に加えて人口増加に伴う土地争奪が激しい西日本の住民を移住させるには、後進地である東国の開発が不可避であるとの観点から、東西のほぼ中間にある近

江の邪馬台国に連合の本拠地を移したのであろう。

『魏志』倭人伝には、伊都国は邪馬台国にいた歴代の王（連合王）によって統率されていたとあって、『後漢書』倭伝には、大倭王（<sup>おおいちおう</sup>連合王である大市王）が邪馬台国に居るとある。これは後漢時代に連合王の東遷があつて、伊都国連合から邪馬台国連合に変わったこと示したと解するのが妥当である。

したがって、連合王の東遷後は伊都国に<sup>いちのおおいぎ</sup>一大率（市大率）という交易の査察官を派遣するとともに、交易ルート上にある対馬・壱岐・唐津にあった3カ国も統率していたことがわかる。

### 3 魏・晋時代

後漢末期に遼東郡の郡主であつた<sup>こうそんど</sup>公孫度が、自立して朝鮮半島を支配するようになったとき、できるだけ多くの東夷を従属国家とするため帯方県を郡に昇格し、狗奴国同盟にも朝貢を認めたのではないだろうか。卑弥呼の時代になって狗奴国と争うようになった原因の一つは、この問題が尾を引いていたからだと考えられる。

糸島市にある後漢から三国時代にかけての<sup>みくもばんじょう</sup>三雲番上遺跡

から数多くの楽浪系土器が、また<sup>みくもいわら</sup>三雲井原遺跡から<sup>すずり</sup>硯面が出土した。楽浪郡から来た中国の商人が長期間ここに逗留して交易を行っていたことは確実で、そのため『魏志』倭人伝によれば当時の倭の 30 クニには漢語の通訳がいたとある。なお、中国商人には華北系と華南系の 2 系統がいたとみられるものの、ジャンク船を用いてここに来航していたのは、山東半島以南の華南系の商人であったとみられる。

魏の時代になって朝貢が認められたのは、金印紫綬を得た卑弥呼の邪馬台国連合だけとなった。だが、狗奴国とそれに追随するクニは、国家の安寧を願うのであれば中国の例からしても連合王は男王が務めるべき、それも先例に従えば鍛冶族から共立すべきであると主張し、争いが激化したことであろう。

3 世紀後葉になったとき、朝鮮では楽浪郡と帯方郡に対する晋の支配力が衰え、高句麗による両郡への略奪があり、中国商人は倭人との交易から撤退を余儀なくされた。これに伴い対馬や壱岐の西海岸にあった集落、あるいは唐津や糸島にあった集落も連動して衰えた。

図 7-3-1 西新町遺跡



これに取って代わったのが韓の商人、正確に言えば船(帆船)を有して韓国中で商売をしていたと『魏志』韓伝にある州胡(済州島)の商人である。彼らは韓人と違ってやや体が小さく言語も異なるとあり、旧早良王国のあった西新町(福岡市早良区)にある竈付き住居に常在して商売を行うようになったので、許可を得た者はそこに行けばいつでも取引ができるようになった。

そのため、“灯火連絡網”は必要が無くなるという大きなメリットが生じたであろう。この時期は卑弥呼の後継者である壺與の時代で、崇神が摂政の男弟王に就任した時期でもあり、その陰には物部による誘導策があったものとみられ、まもなく崇神を連合王とするヤマト連合が発足し、

古墳時代の幕開けとなったのである。

濟州島は地理的利点からみて中国華南との往来もあったはずで、鳥越憲三郎氏は州胡人を倭人の一派とみているが、彼らは独特な石人・石馬等の石造物を有し、527年に乱を起こした北部九州の磐井と共通する文化を持つ。したがって、磐井は濟州島人の系統であった可能性があるものの研究は進んでいない。

注) 石人・石馬等の出土古墳例

福岡県岩戸山 (八女市 石人・石馬)

同 乗場・鶴見山 (八女市 石人)

同 石人山 (広川町 石人)

同 石神山 (みやま市 石人)

大分県臼塚・下山 (臼杵市 石甲)

熊本県チブサン (山鹿市 石人)

同 三の宮 (荒尾市 石人)

同 えだふなやま 江田船山 (和水町 石人)

鳥取県石馬山 (米子市 石人・石馬)

江田船山古墳は銀象嵌ぞうがんの文字入り大刀を合わせて出土したことで名高いが、埼玉県の稲荷山古墳いなりやま (行田市) 出土の

金象嵌の文字入り鉄剣も同時期のものとみられる。しかも、後者の鉄剣は中国江南で造られたと分析されており、濟州島の商人との関係が注目される。

## 4 海外交易の進展

### (1) 鉄とガラス

弥生中期後葉から後期前葉にかけて、中国では漢帝国が周辺国を飲み込んで大きく拡大した時代であるが、当時倭国が必要としていた物品の中心は、中国が戦国時代から生産していた鉄とガラスの製品で、具体的には様々な鉄器の道具を作るために必要な鑄造製の鉄斧、回収された中古の鍛造製刀剣、ガラス玉の原材料となるガラス塊を中国商人から買うことであった。

### (2) 中国の製鉄技術は世界一

銅鉱石であれば 1,000 度弱の温度で原料を溶かすことが可能であるものの、鉄鉱石や硅石を溶かすには 1,600 度程度の高温が必要であり、その技術が当時の朝鮮や倭国にはなく、そうした技術を取得したのは、朝鮮では 4 世紀後葉

(慶尚北道密陽市の製鉄炉遺跡 ⇒ 『魏志』韓伝にある  
べんしんみりみと  
弁辰弥離弥凍国)、倭国では 5 世紀後葉とされている。

ところが、中国では紀元前 4 世紀の戦国時代に、世界の先端をゆく爆風炉（高炉）を用いた鑄鉄の連続生産が始まっており、後漢代の紀元後 30 年に水車を動力とするフイゴが発明されたというのだから驚きである。同じ方式のものがヨーロッパで用いられたのは、14 世紀になってからのことであった。

### (3) 原初的鉄加工

鉄鉱石は熔解して製鉄の工程を経なければ使えないというものではない。例えば、鎌倉時代奥州一関（岩手県一関市）にいた刀鍛冶は、湿地帯にある褐鉄鉱（水酸化鉄のことで別名を高師小僧などといい近江や大和はその優品の産出地）から舞草刀もくさとうを作り、大正時代三陸方面にいた鍛冶屋は、山に入って採取した鉄鉱石から鉄器を作っていた。いずれも熔解しないでそのまま鍛冶炉で熱して鍛え、鍛鉄として加工している。

この方式では良品を作るのに膨大な労働力を要するのは致し方のないことだが、『魏志』韓伝の記述からみて鉄産地であった弁韓・辰韓では、こうした工法によって鉄を加工し、通貨として利用した可能性が高い。

不純物の多い鉄鉱石や褐鉄鉱を鍛冶炉で過熱して鍛えたとき、一部の鉄が溶出した不純物とともに分離し鉄滓の生ずることがあるらしい。製鉄炉のない弥生時代に製鉄があったのではないかと勘違いするのは、これが希に遺跡から出土することによるとみられる。

したがって、鉄器を造る原材料は全てを海外交易に頼っていたわけではなく、鉄鉱石と褐鉄鉱の産地では自前の供給が可能であったことに留意しなければならない。ただし、熔解して不純物を除去した鑄鉄と違い腐食が進みやすいことから、遺物として出土することはほとんどないだろう。

#### (4) 漢の鉄専売制度

鉄・青銅・ガラスなどの取引がより拡大したのは、前漢武帝が朝鮮半島に進出し、それまでは外藩国にすぎなかった東夷の国々を漢帝国に取り込んだ、つまり事実上の植民地となる郡県制を敷いたことにより、鉄の売買に関わる中国商人がこの地に進出できる環境を整えたことによる。

たび重なる戦争で膨大な赤字を負った国家財政を立て直すため、武帝は塩・鉄・酒を国家専売制とした。鉄の場合、全国 50 カ所の鉄産地に鉄官という役所を置き、労役を賦課



された人民や牢獄の服役者などが鉄器製造にあたり、非鉄産地には小鉄官という役所を置いて中古の鉄器などを回収し、鉄官に供給するという徹底ぶりであった。

しかし、鉄産地が外国であれば鉄官による管理は及ばないので、弁韓・辰韓・倭国から安くしかも自由に買える鉄は、商人にとって魅力的なものであったことは想像に難くない。鑄造鉄器・中古鉄器・銅器・ガラス塊と鉄鉱石・砂鉄・銅鉱石・玉などを交換するという取引は、弥生中期から続く楽浪郡の繁栄を支えた根幹であり、高句麗が略奪のためこの地をしばしば襲った理由でもある。

## 5 邪馬台国連合の鉄器生産

図 7-5-1 五斗長垣内遺跡



1 世紀末葉の成立とみられる近江の邪馬台国連合と密接

な関係が想定される鉄器加工の拠点工房（23棟の竪穴住居中12棟）が2001年に出土し、5年後に発掘調査が始まった。淡路島北部の五斗長垣内遺跡（淡路市）で、湿気遮断のため生活には不便な標高200mという丘陵地上にある高地性集落である。

この工房が稼働していたのは1世紀末葉から3世紀前葉までとの見解からみて、概ね倭国大乱前の邪馬台国男王時代の80年間と大乱後の卑弥呼女王時代の前半30年間に相当する。

『記紀』神話にあるイザナギ神を祀る多賀大社が近江にあって、その幽宮かくれのみやである伊弉諾神宮いざなぎが淡路島にあるのは、連合の本拠地と直轄地の関係にあったことを示唆しているとみられ、国生み伝説の初めとして淡路島を選んだ理由は、この工房があったことによるものではないかとの推定もなされている。

邪馬台国時代（弥生後期中葉～終末期）品質の優れた鋳鉄は中国に依存していたが、倭国における鉄器生産はどのようになっていたのかみてみよう。（奈良文研の遺跡出土データベースより）

- ① 九州中北部は、農工具・武器類ともに生産量が極めて多く普及も早かった。そのため各地で開墾が進み、土地争いや水争いによる戦いが多発した。有力首長による統制がなく自由生産であったことによるとみられる。
- ② 近畿の<sup>たじま</sup>但馬・<sup>たんご</sup>丹後・<sup>たんば</sup>丹波・<sup>はりま</sup>播磨は農工具が少なく武器類がやや多い。“灯火連絡網”の場所取りを巡って日本海ルートの出雲勢と瀬戸内海ルート九州勢による争いがあったとみられる。
- ③ 近畿の<sup>せつ</sup>摂津・<sup>おうみ</sup>近江・<sup>やまと</sup>大和・<sup>かわち</sup>河内・<sup>いずみ</sup>和泉・<sup>きい</sup>紀伊と東海は、農工具・武器類ともに極めて少ない。国産の鉄鉱石と褐鉄鉱を製鉄しないで加工していた可能性が高く、船載の鑄鉄は開墾の盛んだった中部・関東方面に回していたとみられる。

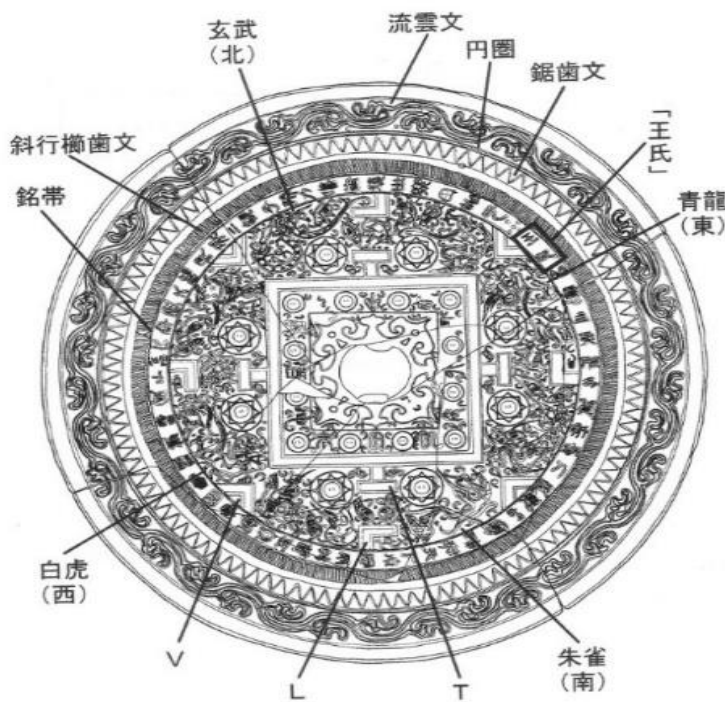
## 6 方格規矩鏡の活用

<sup>ほうかくきくししんきょう</sup>方格規矩四神鏡の中央にある四葉座は天帝の印しであり、天円地方の思想にしたがって東西南北に四神を配置する鏡だが、本来は天地を支配する神々を祀って加護を祈願するのに必要であったとみられるもので、別名をTLV鏡

ともいう。

円球のドーム状になっている天と方形の大地は、TLVの形をしたカギで繋がり、歯車で回転しているというものだが、こうした複雑な造形にたどり着いたのは、天が北極星を中心に回転しているという天動説によるもので、一方の大地は静止していると考えた末の苦心作である。

図 7-6-1 方格規矩四神鏡 (岐阜県教育委員会資料)



四神のうち最も重要なのは東方にいる青竜で、農業に欠かすことのできない水神とされており、集落や王宮の東方にそれを祀るしきたりとなっていた。『魏志』

高句麗伝にある10月の収穫大祭(東盟)では、東方にある大穴の中から木造の水神を迎えて行うことが記されている。

交易には誰でも自由に参加できるというものではなく、

朝貢で倭国を代表する国王と認められた連合王の許可が必要で、その許可証を伊都国にいた一大率に示さないと交易には参加できず、その許可証代わりとして使われたのが後漢・公孫・魏から下賜された銅鏡で、予め連合王から分与されていたのであろう。

32面もの方格規矩鏡が平原1号墓（糸島市）に副葬されていた理由は、それを毎回持ち運ぶのが大変なので、伊都国王に預かっていたことが考えられる。このことは寄港地である対馬や壱岐における取引にあっても同じことで、取締り官である卑狗ひこにこの鏡を提示することが求められたのであろう。

弥生の墳丘墓から出土した鏡の中で2番目に多いのが方格規矩鏡で、中でも四神鏡が多い。福岡県の井原鎗溝1号墓18面以上・平原1号墓32面、岐阜県の観音寺山古墳1面、滋賀県の熊野本古墳1面・小松古墳1面などがあり、何れも鍛冶族系の古墳とみられるところである。

中国では内行花文鏡と同時期に造られ、洛陽の墳墓からの出土数も比較的多い。この鏡の図柄は複雑なことから模倣が難しかったとみられ、日本で出土したものは全て舶載

鏡とされている。

## 7 交易船来航の連絡網

鑄造鉄斧などを積んだジャンク船が対馬、壱岐を経て唐津に入ったとき、灯火もしくは烽火によって糸島に連絡し、ここから火枝<sup>ひえ</sup>を使って 26 の連合加入クニに次々と連絡が行われ、この遠隔地ネットワークの守護神が『記紀』にいうタカミムスビ神だったとみられる。なお、『記紀』では神ムスビという神も登場するが、その神はおそらく集落と集落をつなぐ道路網の守護神のことで、後世に謂う道祖神のことと思われる。

なお、交易に使用されたとみられるジャンク船は、世界的にみても良くできた大型の帆船だが、元来は川船として造られたもので船底が浅く、重い荷物を積まないで船は安定しないという欠点がある。その点、多量の金属を運ぶには適していたのであろう。

火枝を使えば伊都国から邪馬台国や狗奴国までは、2、3日もあれば連絡が可能であったとみられるのに対し、舟を使って連絡すれば 30 日以上かかる計算なので、交易船の伊都国滞在や 26 クニの準備が大幅に短縮され、諸経費の節約



となる。

連絡を受けた各クニは直ちに砂鉄・水銀朱・玉類・真珠・サンゴなどを舟に積み込み、火枝を使って出発の連絡を行うとともに、通訳を帯同して糸島に行くのだが、通訳を配置するにも連合王の承認と斡旋仲立ちが必要となっていたであろう。

彼らが行く先々で宿泊をし、食事をとるのは湊津みなとづにあるクニの市場である。その管理運営者は連合王（大市王）が派遣した「大市」おおいちで、出発の連絡は中継地の火枝から大市にも連絡があり、市場はそれを受け入れる準備に追われることとなる。市場は取引を行う利用者から徴収した利用料で経費が賄われるため、交易に伴う宿泊や食事は全て無料であったとみられる。

こうした中継基地がある湊津の中で、往来の中間地にあった日本海ルートの出雲と瀬戸内海ルートつしの吉備津島（投ま馬国）は、拠点的な加入クニとして重要な役割を果たしていたことが想定される。

## 8 交易の安全確保

伊都国における交易や国内の市場における取引で最も大

切なことは、取引に参加する者の身の安全が確保されていること、さらに商品が不当に奪われることのないよう治安維持を保つことにある。

そのため、市場には幾重にも深い溝を回した環溝施設を造り、武器を携帯した武人を配置して取り締まりを行っていたとみられる。また、交易ルート上にある国に卑狗ひこや卑奴母離ひなもりという官が置かれていたのは、警察官のような取り締まりを行う機関が必要だったからにはほかならず、そこに配置されていたのは武人の物部であったとみられる。

さらに、不正な取引を防止するため、監視を行う役人を各地に置いていたとする驚くべきことが『魏志』倭人伝に書かれている。こうした仕組みがあったということは、連合が各地に設置した市場のネットワークを牛耳っていたことをものがたっており、ネットワークは弥生後期後半になったとき東国にも拡張され始め、多くの移住民のあったことがうかがわれる。

したがって、連合王や同盟王が北九州から近江や美濃に進出ができたのは、『記紀』にある神武東征のような猊としたものではなく、流通基盤の構築による所産であった。

## 8章 武人物部の東遷

### 1 早良王国から東遷

洪水被害が増加した弥生中期末(紀元前1世紀頃)以降、諸国の王とその一族はその責任を問われて被災地住民に襲われることが多くなり、一族の身を守るため防衛手段を講じる必要が生じた。

弥生の博物館といわれる鳥取県青谷上寺地遺跡(鳥取市)の後期後葉にあつては、実に109体におよぶ殺傷人骨が出土し、成人の男女のみならず子供まで犠牲となり、凄惨な状況で殺戮された後、溝に捨てられたことがわかった。

また、交易に必要な各種資源の占有を巡る争い、集落の住人や市場における争いやもめごと、もしくは盗難などの犯罪に対応するため、治安の維持を担う人材が必要となる。

それに呼応したのが、紀元前3世紀から同2世紀にかけて博多湾の西部に、早良王国を築いていた物部の武人であったとみられる。彼らは中四国以東の国々から武人派遣の要請を受けて各地に進出し、中には王となった者も多くいたであろう。

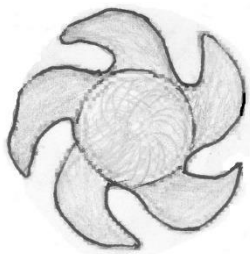
なお、発掘された王墓といわれる墳墓の遺物からみて、

武人が王となった場合祭祀を行っていたのはシャーマンの妻、もしくは別に雇ったシャーマンが祭祀を代行していたとみられる。

東大阪市にある石切劍箭神社には、物部の祖先神であるいしきりつるぎや饒速日神が祀られ、銅劍と矢を屋根に飾っている。このことは軍事部族がその本体にいたことを示唆している。

なお、現在ではモノノベと読んで部民であるかのような印象を与えているが、それは物部守屋が滅ぼされた後のことで、元来は武人を表すモノノオあるいはモノオではなかったかとする説は妥当とみられる。

#### 図 8-1-1 巴形銅器



したがって、物部とは単に鍛冶族などのものづくり工人であるてひと手人を中心とした渡来集団ではなく、戦士を擁する武人を本体とし、その周辺に手人や交易を行う舟師を有した集団で、『記紀』にいうたけのうちすくね武内宿祢とは物部の本体である武人の指導者を指したものであろう。

遺跡から出土した遺物の中に、矛・槍・劍・やじり鏃・甲冑あるいは盾飾りのともえがた巴形銅器がある場合、もしくは『記紀』に

登場する人物名に〇〇ヒコという名が付く事例、または武内宿祢本人やその子孫と称される事例にあっては、物部系の武人がいた可能性が高いということになる。中でも、巴形銅器は武人が北九州からどの方面に進出していったのかを示唆してくれる貴重な資料である。

だが、ヤマト朝廷とすれば権力抗争に絡んでその主流を597年に滅ぼした逆族であり、英雄扱いにはできないので、神代編における神々の争いや神武東征、あるいは武内宿祢を登場させるなどして置き換えたとみななければならない。

弥生後期の時代、東日本開発の最前線にあって同盟王がいた狗奴国と連合王がいた邪馬台国には、多くの物部の武人が配置されていたとみられ、先に取り上げた武人の指導者が保有する遺物が、関連の遺跡から出土している。

彼らは、倭国大乱のとき王らを守るため押し寄せる住民と戦い、狗奴国と邪馬台国が連合の主導権を握るため争ったときは武人同士が戦い、卑弥呼の死後男王を立てたときも武人同士が戦って1千人余の犠牲者があったことは『魏志』にあるとおりである。

## 2 107年の朝貢主体

前漢時代から交易権を認められていた伊都国の同盟王は、加盟国の増加に伴って連合王となり、57年に倭国を代表する王と後漢から認められ、連合に拡大して邪馬台国に東遷したとみられる。

なぜなら、『後漢書』倭国伝が邪馬台国に大倭王（大市王）<sup>おおいち</sup>がいることを取り上げた狙いは、伊都国から東遷したことを強調するためであったと解されるからである。したがって、この記述は 107 年の朝貢と並んで極めて重要な情報である。

続いて奴国同盟の王も狗奴国に東遷したとみられ、遼東侯公孫が朝鮮半島を自律的に支配する以前、両国は厳しい対立関係にはななかったので、107 年の後漢の安帝に対する朝貢では協力して行うことができたものの、金印紫綬は得られなかった。

一説によれば、その原因は国書に複数の国を代表国として記載したことによるものとされている。合同の朝貢には合意したものの、誰を連合王として選ぶか意見がまとまらず、渡海の期限が迫ってきたことによる苦肉の策であつたらう。



また、『魏志』韓伝に馬韓人は中国からの逃亡者とみられる難民を「蘇塗<sup>そと</sup>」という特殊集落で受け入れ、辰韓に送り込んでいたとみられるが、物部も北九州では同様のことを行っていたと考えられる。

彼らは韓にいたときの経験を活かし、後から渡来してきた者の面倒をみながら、先導する風水師を付けて各地に送り込むという重要な役割を担い、送り込まれた者は当然のことながら物部のネットワークの一員となり、その後の国土開発や倭国統一に大きな貢献をしたことはいままでもないであろう。

岐阜県の象鼻山の近くにある多岐<sup>たぎ</sup>神社、あるいは瑞龍寺山の近くにある井奈波<sup>いなば</sup>神社、愛知県の一宮市にある真清田<sup>ますみだ</sup>神社にはいずれも物部が絡んでおり、近江にも物部の事跡が色濃く残っている。

なお、当時の鏡や高価なガラス製釧<sup>くしろ</sup>の出土が、日本海側に集中していることからみて、北九州・山陰・北近畿・東海をつなぐ交易ルートがあったとみられ、朝貢はこのルート上にあった国々が狗奴国同盟と邪馬台国連合の枠を越えて共同で行ったもので、それをまとめたのが物部系の武人

の王らであったとみられる。

通説では、このとき朝貢した倭国王の帥升すいしょうを伊都国王とし、その関係で注目されたのが井原鎗溝遺跡いわらやりみぞにある木棺墓群であった。その中に、刀剣・鎧の一部・巴形銅器 2 個・方格規矩四神鏡 18 面以上を出土した墓があり、被葬者は武人の帥升ではないかと推定されている。

しかし、なぜ面土国めんどもしくは面上国めんじょうが伊都国に変わったのかという疑問も残っている。単なる誤りとみる説や、当時の人々は洪水を避けるため低地から丘陵地に移住しており、面上もしくは面土とは固有名詞ではなく、そうした国を表す一般名詞のオカ（丘・岡）とみる説があり、帥升は東遷した邪馬台国連合の王であったとする説も成立可能である。

北九州にいた二人の王が相次いで本州のほぼ中央に進出した理由だが、伊勢や宇陀で採れた水銀朱に関係があるという説もさることながら、水争いや土地争いの激しかった朝鮮や北九州の住民を、東日本に移住させるため新たな拠点を必要とし、東西の往来に便利で食糧生産の豊富な場所を選択したからだと思われる。

また、金属・玉石などの資源開発を目的とした山師や工人の移住も必要となるが、彼らは農業ができないため食糧や衣服は現地で別に調達しなければならないという問題がある。

そのため、市場の開設と水田や畑地の開発が先に必要となるので、農民を先に送り込むあるいは先住者の協力を得る必要があった。

こうした一連の開発事業を安全かつ確実に実行するには事前調査が不可欠であり、携わっていたのが風水師であったことは、前著で取り上げたところである。

## 9章 弥生の王墓は平地から丘陵へ

### 1 王墓にみる九州と中四国以東の違い

弥生中期中葉にあたる紀元前 108 年、前漢武帝が朝鮮半島に 4 郡を設けてその大半を支配下に置き、以降朝鮮と倭国の交易が拡大し玉と鉄器の交換が盛んとなっている。

その結果、倭国ではクニの序列化が行われ、住民間の差別化が拡大したことに伴い、弥生墳丘墓の大型化が進んだことは、玉作族の首長墓で丹後半島にある全長 32m の日吉ヶ丘墳丘墓（京都府与謝野町）の例などから明らかとなった。

ただし、こうした墓形の変化がみられるのは中四国以東のことであって、先進地であるはずの九州では全くみられないという不思議な現象がある。

九州の王墓は早くから朝鮮の影響があって、祭祀に用いた鏡・勾玉・刀剣からなる三種の神器を副葬品としているものの、墳墓の造りはいずれも簡素で大型のものは多人数を埋葬しており、中四国以東の傾向とは明らかに異なっている。九州で変化が起きたのは、大和から始まった前方後円墳が各地に広まった古墳時代の 4 世紀以降のことであっ

た。

- ① 福岡県須玖岡本墳丘墓 D 地点(春日市)  
巨石下に紀元前 1 世紀中頃の甕棺 1 基  
前漢に朝貢した奴国王墓か  
破壊により墳丘墓の大きさ不明
- ② 福岡県三雲南小路周溝墓(糸島市)  
紀元前 1 世紀末頃の甕棺 2 基  
前漢に朝貢した伊都国王墓と王妃墓か  
(32m×22m)
- ③ 佐賀県吉野ヶ里北墳丘墓(吉野ヶ里町)  
紀元前 2～同 1 世紀頃の甕棺 14 基  
九州最大の国王墓 (40m×27 m×4.5 m 以上)

一般的には弥生中期後葉から後期にかけて地球規模の気候変動があり、洪水の多発化に伴い本州への移住者が多くなった、つまり北九州は交易や移住の通過点としての役割にとどまり、巨大な環溝集落であった吉野ヶ里が後期になって急速に衰えたように、王国の規模は拡大しなくなっていたことがあげられている。

しかし、これだけでは説明がつかないのではないだろう

か。気候変動の影響は本州でも多発しており、低地の平野部から高地の丘陵や山の裾野に集落が移動するという現象がみられ、今日あるような農村の風景と重なるものである。

この点について、私は次のように解釈している。

- ① 前漢末期のころ、交易の伊都国同盟と金属加工の奴国同盟は互いに補完し合う関係で、王墓の遺物から見て前者がやや上回る力があつたとみられる。
- ② 中四国以東では出雲が発祥地とみられる河川流水の安定を祈願する銅剣類の祭祀、近畿が発祥地とみられる井泉湧水の安定を祈願する銅鐸の祭祀が二大潮流となつて各地に広まつたものの、これらの祭祀では効果がないことを知り、祭祀具を鉄剣や銅鏡に変える必要があつた。
- ③ 一方、それらの製作供給地であつた朝鮮や北九州では、長年に渡る焼き畑農業や金属加工・土器製作に加え、人口増に伴う開田・開畑のため多くの森林を伐採し続けた結果、深刻な洪水被害と住民の争いが多発し、食糧と森林を求めて中四国以東に移住せざるを得なかつた。



## 2 中四国以東の王墓の変化

概ね紀元頃から始まる弥生後期になると王莽の<sup>おうもう</sup>新<sup>しん</sup>へ朝貢外交が繰り返され、新たな文化技術の直接導入が始まったとみられる。

これに伴って中四国以東のクニは水系ごとにまとまり、規模が拡大して王や役人が誕生し、その墓は身分に応じて様々な大きさとなり、国ごとに造形の多様化が顕著となった。

また、交易の拡大によって連合や同盟に加入するクニが多くなり、陰陽五行思想の導入に伴って方位を正しく定め、王宮・祭祀・墓地の在り方に大きな変化があり、連合王や同盟王の墓地は自然の丘陵や山を削って造る中国式の塚墓を採用したものがみられるようになる。

代表的な事例とされる次の①は瀬戸内の中間地、②は山陰の中間地にあり、いずれも東西交流の中間拠点とみられる地域にある。

### ① 岡山県<sup>たてつき</sup>楯築墳丘墓（倉敷市）

倭国大乱後の2世紀後半～3世紀前半

<sup>つしま</sup>投馬国（<sup>きび</sup>吉備津島）の王墓か

標高 50m の丘陵地に不整形双方中円墳 (80m × 43m × 4.5m) 木槨 (3.5m × 1.5m) 木棺 (2 m × 0.7m)

- ② 島根県西谷墳墓群 (出雲市)  
倭国大乱後の 2 世紀末～3 世紀  
出雲国の王墓か

標高 40m の丘陵地に 6 基の四隅突出型墳丘墓  
9 号墓が最大 (42m × 35m × 4.5m) で未発掘  
3 号墓 (40m × 30m × 4.5m 突出部 7～8m × 6～7  
m 木槨木棺 家族 8 人を埋葬 主体埋葬地に 4 本の  
柱穴→建物があつた)

### 3 類例のない美濃と近江の高所塚墓

図 9-3-1 高所塚墓の所在地



- ① 岐阜県瑞龍寺山頂墳 (岐阜市)

2世紀初頭

全長 46m 標高 156mの山頂 突出部付き方形又は  
前方後方形

② 岐阜県象鼻山<sup>ぞうびさん</sup>1号墓（養老町）

3世紀中葉

全長 40m 標高 142mの丘陵地 前方後方形

③ 岐阜県観音寺山<sup>かんのんじやま</sup>古墳（美濃市）

3世紀中葉～後葉

全長 21m 標高 155mの丘陵地 前方後方形

④ 滋賀県宇佐山<sup>うさやま</sup>古墳（大津市）

2世紀後葉

全長 17m 標高 150mの丘陵地 方形周溝墓

⑤ 滋賀県熊野本<sup>くまのもと</sup>古墳（高島市）

3世紀中葉

全長 28m 標高 165mの丘陵地 前方後方形

⑥ 滋賀県小松古墳（長浜市）

3世紀中葉～後葉

全長 60m 標高 190mの丘陵地 前方後方形

弥生後期後葉から終末期の連合または同盟の王墓とみら

れるものは、標高が 100m 以上の高い丘陵山頂を削って整えた、つまり台状墓系の塚墓で方形という特色があり、しかも岐阜県と滋賀県の 2 県に限定される。

これらの墓地は開発や出土物の発見により偶然見つかったものが多いので、既に破壊されたものや未発見のものも数多くあるのだろう。

これまで発見されたものからみて、こうした動きは少なくとも倭国大乱以前の 2 世紀初頭から始まっており、王墓が見晴らしのいい丘陵地に造られるようになった理由は、鍛冶族の連合王ないしは同盟王が各地に監視所・灯火場・烽火場を造り、各クニに市場を設けてこれらをネットワーク化した結果、交易の恩恵を加入クニに与え続け、洪水被害を避けるため平地から丘陵地への移住、あるいは西日本から東日本への移住が可能となったことによるものである。

『記紀』の神代編がこれをタカミムスビの神系としてまとめたことは先に指摘したとおりで、鍛冶族がその主役を担っていたことは、国造りの過程で生まれた多くの神々の名に、「日」や「火」が付いていることから知り得る。

こうした塚墓の存在は、前々著で指摘した 7 万戸を養え

る水田面積、朝貢の証しである天地の祭祀施設と並ぶ重要な観点であり、邪馬台国の所在を裏付ける3番目の証しであると私はみたところである。

#### 4 伊都国の女王墓

図 9-4-1 平原遺跡見取図（前原市教育委員会資料）



福岡県平原遺跡<sup>ひらばる</sup>1号墓（糸島市）は方形周溝墓で、その被葬者は伊都国の女王とされ、当初は2号墓が弥生後期前半で1号墓は後期中葉とされていた。だが、今では後期前葉とする説や終末期とする説があって混乱している。2世

紀にも及ぶ開きが出た背景には、邪馬台国畿内説と九州説の対立があり、論争は収まりそうにもないのが現状である。

① 1号墓

低丘陵地の方形周溝墓（13m×8m）

竹型木棺 副葬品（内行花文鏡<sup>ないこうかもんきょう</sup> 7面・方格規矩鏡<sup>ほうかくきくきょう</sup>  
32面・四璃文鏡<sup>しりもんきょう</sup> 1面・刀剣1本・ガラス玉・メノウ玉・コハク玉）

② 2号墓

1号墓の南側にある円墳

後期前半に親族1人を埋葬

③ 3・4号墓

1号墓の東側にある円墳

殉死者16人を埋葬

④ 柱穴の跡

1号墓の東南に高さ20m程の大木

1号墓の埋葬地上に建物

しかし、『魏志』倭人伝の記述は信用できないというのであれば話は別だが、交易の窓口であった伊都国を邪馬台国連合王が累代統率してきたこと、他の墳丘墓では殉死者

がみられないのに、伊都国の女王墓に限って卑弥呼と同じように殉死者を伴っていたことからみれば、被葬者は卑弥呼の同族で死去は3世紀後葉の終末期、楽浪郡・帯方郡との交易が途絶えて邪馬台国連合が滅亡した<sup>いちよ</sup>壺與女王のときとみるのが自然である。

前述のとおり、副葬品にある32面の方格規矩鏡は卑弥呼が加入クニに分与したもので、交易のため伊都国王が預かっていた分と思われる。自国の祭祀を行うのであれば内行花文鏡も1面で足りるはずで、6面については交易のネットワークを組んでいる対馬・壺岐・唐津など、九州にある6クニ分の祭祀も合わせて行っていたことによるものであろう。

また、東南方向に建てられた大きな柱は、中国でいえば天帝と皇帝が会合するために造られた通天台という祭祀施設に相当するもので、太陽神の復活を願う切実な思いから、自らの命を絶って捧げたことを天に伝えるための祭祀施設と解される。よって、その死は楽浪郡・帯方郡の弱体化に伴って交易がストップしたことと関係があり、自然死ではなかったという見方ができる。

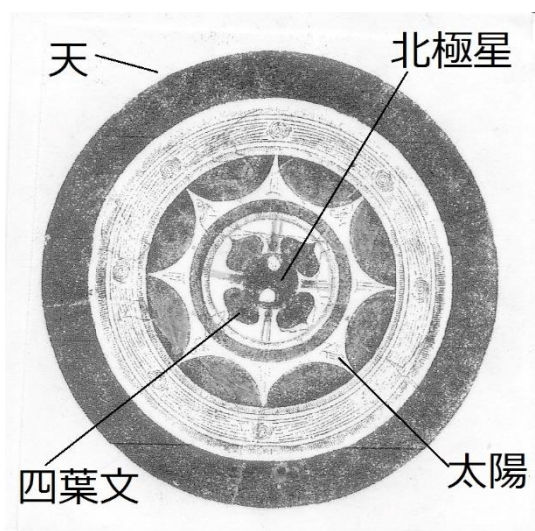


## 5 最も重要だった内行花文鏡

弥生の墳丘墓から出土した鏡の中で最も多いのが内行花文鏡である。福岡県の三雲南小路1号墓26面以上、同2号墓16面以上（以上糸島市）、須玖岡本D地点13面以上（春日市）、井原鎗溝1号墓1面、同7号墓1面、平原1号墓7面（以上糸島市 46.5 cmの超大型八葉鏡4面を含みうち1面は魔鏡か）が代表的なものである。

また、岐阜県の瑞龍寺山頂墳2号埋葬地1面（岐阜市）、愛知県の<sup>かぶとやしき</sup>甲屋敷2号墳1面（小牧市）、<sup>うつぎ</sup>宇津木古墳1面（豊田市）、滋賀県では熊野本古墳1面（高島市）・小松古墳1面（長浜市）・<sup>とのにし</sup>斗西遺跡1面（東近江市）がある。

図9-5-1 内行花文鏡（岐阜県教育委員会資料）



この図は瑞龍寺山頂古墳から出土したものの模写図であるが、中国で<sup>れんこもんきょう</sup>連弧文鏡と称される前漢末期以降の鏡で、洛陽の墳墓から出土した鏡の中では出土数が最も多い。日本で出土したも

の多くは舶載鏡とみられるが、一部倭鏡もあるとされて

いる。

副葬品として棺内に置かれたことから、太陽信仰の埋葬者にとっては最も大事な鏡であったとされ、四葉文鏡が一般的で六葉文鏡や八葉文鏡もある。太陽信仰は農耕民に欠かせないものであったが、燃える火の元は太陽の日であるとの考えから、火を使う鍛冶族や土師族も信仰するようになった。おそらく、卑弥呼の墓には中四国以東における連合の加入国数と同数の破砕されたこの鏡が、埋納されていることであろう。

図柄は道教の天円思想に基づくもので、中心の突起部分が天極にある北極星、四葉文は東西南北を支配する四帝、その外側が太陽であり、天上界における陰陽の世界即ち夜と昼を表現している。

仏教が中国にいつ伝来したのか諸説があるものの、紀元前後のころではないかとみられ、四葉文は蓮の花を象ったものである。

なお、青銅は鉄よりも腐食し難くしかも丈夫なことから、破砕するのは容易なことではなかったにもかかわらず、被葬者にとって大事な鏡ほど死後破砕してから棺に入れた。

その理由だが、魂のこもった所有物をそのままにしておけば、霊魂が生者即ち陽の世界に取り残され、死者即ち陰の世界には行けなくなって生まれ変わるができないという輪廻の信仰によるものとみられる。

したがって、古墳時代の三角縁神獸鏡さんかくぶちしんじゅうきょうのように原型をとどめ、しかも棺外に置かれている鏡は、被葬者にとって重要な鏡ではなかったということになる。

## 10章 卑弥呼の王宮と墓地

### 1 卑弥呼の墓の所在地

これまでも述べてきたことからみて、卑弥呼の王宮と墓の所在地が想定される場所の条件は次のようになる。

- ① 王宮は陰陽五行説に従えば太陽が昇る琵琶湖東岸側で、伊勢遺跡の材料を解体して利用したとみられ、ここからそれほど遠くない場所にある。
- ② 墓地は陰陽五行説に従えば太陽が沈む琵琶湖西岸側で、火見の監視所があった比叡丘陵の近江側のいずれかの峰の頂上にある。

発掘をしないで検討をつけるとなれば、②の条件による墓地の方が取り組みやすいことは明らかで、『魏志』倭人伝に書かれたことが参考にできる。

さらに、『古事記』に書かれたアマテラス神とスサノオ神の激しい対立と鬪争の神話は、卑弥呼女王と卑弥弓呼男<sup>ひみひこ</sup>王の対立関係を題材にしたとみる識者が多い。

中でも、アマテラス神が天の石屋戸<sup>あめ いわやと</sup>に隠れて暗闇となった話は、古来神楽舞の名場面となってきた。この物語に関する私の解釈は、卑弥呼が鬪争中に亡くなって石屋戸のあ

る墓地に埋葬され、その魂を天に送って蘇りを願うため、墓前に大勢の人が集まって賑やかに舞い踊ったとみるものである。したがって、墓地の条件は次のようになる。

- ① 径 100 余歩（当時の規準は 1 歩 6 尺、1 尺 24 cm なので、直径 150m 弱の円形）
- ② 塚墓（平地に盛り土した墳墓ではなく、丘陵や山の頂上を削整）
- ③ 殉死者が 100 余人（平原 1 号墓の例から塚墓に隣接する低い所に直立状態で埋葬）
- ④ 石屋戸（墓地の周辺に大きな岩）

図 10-1-1 八王子山の位置図





図 10-1-2 八王子山の地形図



後世において悟られなくするため『記紀』編纂後、取り壊しはしないまでも何らかの改変があったのではないかとの不安もかすめたが、とにもかくにもこれらの条件を勘案しながら、比叡丘陵にある峰々の地形図を片端から探してみることにした。

すると、これを充たす唯一の峰が、日吉大社の奥宮がある八王子山（標高 381m）にあるとわかったのである。因みに八王子という名の由来をみると仏教から生まれたもの

で、過去の世にいた2万人の日月灯明仏にちがつとうみょうぶつの最後仏は、出家前に8人の王子をもうけていたとする教えが法華経にある。

これが平安時代の神仏習合の時代に、その8人は『記紀』神話のアマテラス神とスサノオ神が天の安河あめ やすかわ うけいで誓約をして神力を競い合ったとき、アマテラス神が生んだ3女神（タキリビメ・イチキシマヒメ・タキツヒメ）とスサノオ神が生んだ5男神（マサカツアカツカチハヤヒアメノオシホノミミ・アメノホヒ・アマツヒコネ・イクツヒコネ・クマノクスビ）がそれにあたりとされた。したがって、卑弥呼の時代に付された名称でないことは明らかで、仏教と神道の混合を図った天台宗によるものとみられる。

### 図 10-1-3 三宮と牛尾宮



うしおのみや  
牛尾宮は日吉大社  
東宮の奥宮で祭神は  
おおやまくい さんのみや じゅげ  
大山咋神、三宮は樹下  
神社の奥宮で祭神は  
かもたまよりびめ  
鴨玉依姫神で、卑弥呼  
に關係があるとみられ  
るのは後者で鴨かもとは神かむ



の転訛した尊称であり、創建は崇神帝 7 年という伝承がある。

一見、その神名は玉作族の巫女一般を表したように神名となっているが、『日本書紀』崇神帝 5 年にある三輪山大物おおももの主神ぬしの妻である活玉依姫神いくたまよりひめの活いくとは神の尊称であるから二神は同神とみられる。

また、同帝 10 年にある武埴安彦たけはにやすひこの反乱鎮圧と箸墓古墳はしはかに葬られた倭迹迹日百襲姫命やまとととひももそひめのみことが大物主神と結婚して死に至る神話が盛り込まれているものの、前後の流れはかみ合わない。この神話は後で無理に挿入されたのではないか。

#### 図 10-1-4 金大巖



二つの奥宮の間の石段の上にあるこがねの金大巖おおいわとか鏡岩といわれる 10m もの大岩は、アマテラス神話に出てくる天あめの石屋戸いわやと、俗にいうアマノイワトにあたるとみられ

るもので、この大岩の後ろが八王子山である。

図 10-1-5 金大巖から見た琵琶湖



比叡山の麓にある坂本は天台宗の創始者であるでんぎょうだいし伝教大師さいちょう最澄の生まれ故郷だが、9世紀のかんむ桓武天皇の時代に寺院が設置され、平安京の北東の

守護神として日吉大社は天台宗の本山である比叡山と一体であった。

荒法師が都に繰り出したみこし神輿は日吉大社のものであったが、織田信長による焼き討ちにより寺院や大社は全てが灰塵に帰し住人は皆殺しとなった。その後豊臣秀吉と徳川幕府によって再興され、二棟の奥宮は元禄時代に建てられたものである。

山頂までさらに登ってみると、主峰の頂上付近は円形のドーム状になっており、中央部にははりいし貼石ないしはふきいし葺石とみられる石で覆われているので、この山が自然の状態ではな



く手をかけて整備した円墳であることを示唆している。

図 10-1-6 八王子山の主峰（西⇒東）



図 10-1-7 主峰のケルン



弥生中期後葉の鳥取県  
うめだかやうね  
梅田萱峰墳丘墓(大山町)  
や前述の平原1号墓では、  
墳丘の頂上に建物のあつ  
たことが知られており、  
八王子山の頂上にある直

径が 10m程度と認められる葺石の上にも建物があつたと  
みられる。中央には登山者が葺石を拾って積み上げたケル

ンがある。

図 10-1-8 尾根道



主峰を少し下ってから北西にある副峰に至る道は細い尾根道で、両側の下方は深い谷となっておりせせらぎの音が聞こえる。主峰・尾根道・副峰は、卑弥呼が死去した 1700 余年前

からみれば、風化によって土壌が流失し全体が低く小さくなったことであろう。

図 10-1-9 副峰（西⇒東）



卑弥呼の墓で注目されるのは殉死者が 100 余人もいたこ



とであり、北九州の糸島市にある平原1号墓の場合、16人の殉死者は隣接する二つの円墳に立ったままの姿勢で埋められていたことから、副峰一帯も古墳の一部であって、殉葬者はこの周辺一帯に埋められたのではないかと想定される。

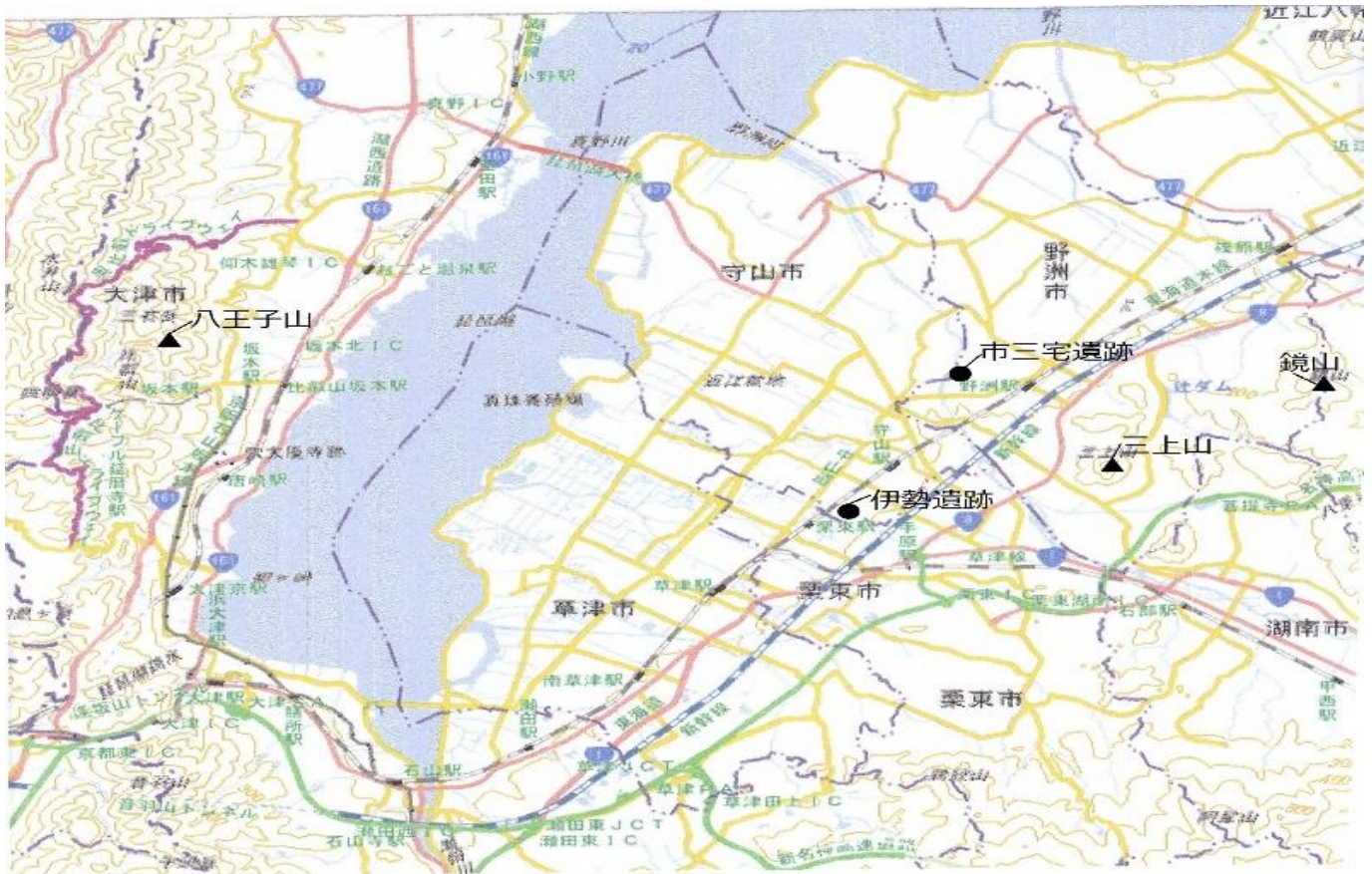
こうした観点から八王子山の全体をみたとき、古墳はやや変形ではあるが前方後円墳に極めて類似する形となっていることがわかる。

## 2 卑弥呼の王宮所在地

八王子山が卑弥呼の墓地だとすれば、春分・秋分のとき太陽は真東にある鏡山（標高 384m）の方向から昇り八王子山の方向に沈むので、陰陽五行思想からみれば、二つの山を結ぶ線上のどこかに王宮があったはずである

鏡山は別名では竜王山という地名であり、東方には青竜という守護神、つまり水神がいるとする道教の前提からみて、竜蛇神が暴れて洪水を起こすことのないよう、または活動が弱すぎて干ばつになることのないよう、この山のどこかで水神祭が行われていたのではないだろうか。

図 10-2-1 王宮所在推定図



すると、その可能性が高いところといえば、玉作工房が出土した<sup>いちみやけ</sup>市三宅遺跡（野洲市）の周辺と重なり、アマテラス神が玉作を得意としていることからすれば、卑弥呼は玉作族出身のシャーマンであったこととぴたり合う。ただし、当時の野洲川本流が伊勢遺跡の東側を流れていたとなれば、大洪水によって埋まった、しかも今の野洲川の下になっている可能性が高いとみられる。



# 11章 邪馬台国とヤマト国を繋ぐ箸墓古墳

## 1 壺與の仮埋葬地

図 11-1-1 八王子山・檜原神社・箸墓古墳の位置図



247～248年に卑弥呼が亡くなり、邪馬台国連合は後継者として連合王に男王を共立した結果、攻伐争乱が起きて卑弥呼と同族のシャーマンであった 13 歳の<sup>いちよ</sup>壺與が女王に共



立された。

先に共立された男王が鍛冶族の山王日枝族で、狗奴国同盟の卑弥弓呼男王ひみひことは同族関係にあったとみられるのに対し、壺與が玉作族の出身であったことはいうまでもないだろう。

したがって、八王子山が卑弥呼の墓だとすれば、壺與の墓は八王子山周辺の峰にあるはずである。しかし、1世紀末葉から3世紀後葉にかけて倭国を牽引してきた邪馬台国連合は、楽浪郡・帯方郡の弱体化に伴って交易が不可能となり、中国との交易は壺與の代で破綻したという特殊事情がある。

倭国ではその代替として交易の相手を三韓にいた濟州島の商人に求め、窓口は糸島から博多に移したのだが、当時の古墳に埋納された膨大な量の鉄器からみて、質量ともにそれまでの実績を上回る結果となったことがうかがえる。

邪馬台国連合の摂政即ち男弟王おととなっていた崇神帝の指揮の下で尽力をしたのは、かつての早良王国にいた物部で、107年の大同団結による朝貢に次ぐ成果であったとみられる。

なお、前著で指摘したとおり、崇神帝の<sup>いみな</sup>諱であるミマキイリヒコの「イリ」とは、朝鮮半島系言語の「泉」即ち通貨の貨泉（和泉）を意味し、交易の国であったとみられる大阪府池上曾根遺跡（和泉市・泉大津市）を支配した武人系の王族とみられる。

こうした実績を背景に、崇神帝は九州から関東に至る物部系の王らが参加したヤマト連合を創設し、人心の一新を図るため都を近江から大和に遷すとともに、墳墓の形態に格差をつけて政権の承認を必要とする大改革を強行したのであろう。

中でも、新政権の目玉であって統一のシンボルともいえる墳墓の改革は、目に見えてわかりやすいものであったから、政権自身はそのモデルとなるものを大和に造る必要があり、その第1号となったのが前方後円墳の<sup>はしはか</sup>箸墓古墳であったとみられる。

古墳は単に死者を埋葬するための施設にとどまらず、崇神帝がヤマト連合の<sup>おおえ</sup>大兄王に就任するにあたり、邪馬台国連合の壺與女王から引き継ぐ儀礼祭祀の場としても重要なもので、王権神授のための墳墓ということになる。

こうした作法は、中国の皇帝が行う陵寝制度から学んだとみられ、皇帝が死去したとき、後継者の新皇帝は前皇帝の陵墓の近くに寝殿を建てて喪に服すとともに、そこから天下に布令を発するのがしきたりとなっていた。

自殺死とみられる壱與女王の遺体は、直ちに大和に運ばれ仮埋葬をしたはずだが、その地はどこなのか。卑弥呼の墓とみられる八王子山を起点として東経 135 度 51 分を真南に下り、奈良盆地を突き進むと三輪山山麓に至る。

この辺りは山辺の道に沿って多くの王墓や神社があるものの、先ず注目したのは元伊勢といわれる檜原神社で、陰陽五行思想に明るい崇神帝は仮埋葬地としてここを選んだ可能性がある。娘の豊鍬入姫とよすきいりひめにアマテラス神を祀らせたと伝わっているところで、奈良盆地を広く見渡せるところにある。

## 2 箸墓古墳の築造

本埋葬は檜原神社から西に向かって下ったところにある箸墓古墳の地に定めたものであろう。こうした墓地の選定方式は、景行帝（『記紀』よれば大和から近江に遷都）・成務帝・仲哀帝と続いた大和・近江政権から河内政権に変わ

ったときもみられるもので、仲哀陵は応神陵がある河内にある。

壱與の場合、魏・晋が認めてきた倭国を代表する邪馬台国連合の女王とはいえ、大和の住民にとっては他国の女王にすぎない。したがって、古墳の築造に駆り出されることには抵抗があり、軋轢の生じたことが読み取れる。

その対策として編み出されたのが、奈良盆地における干ばつや洪水対策のため、巨大な溜池を兼ねた古墳造成を行うことであり、古墳の周囲では市を開催して地域住民の生活安定に寄与することを狙ったのであろう。

そのため、埋葬される女王は三輪山の竜蛇神即ち水神に捧げられるという神話が必要になり、通称では大市墓といわれてきた由縁もこの点にあろう。

その後が続いた歴代の王はもちろんのこと、それを支えるため大和に移住してきた関係国の有力首長も同じ立場なので、同様の古墳を三輪山山麓に造り続けたとみられる。

### 3 ヤマト連合の守護神

伝承に基づく崇神帝の陵墓・王宮・檜原神社・箸墓古墳のバランスを見ると形が整わない。金屋かなやの辺りにあったと

いう王宮がもっと南にあったのか、あるいは景行陵が真の崇神陵なのか不明だが、王宮は大和川の川岸にあった市場の近くに置かれていたとみられるものの、洪水によって流路がたびたび変わり、今ではその位置がよくわからない。

図 11-3-1 陵墓・王宮の配置



陵墓と王宮の配置を確認すると、東に卑弥呼が仕えたアマテラス神を祀った檜原神社（壱與の仮埋葬地）、西に壱與を埋葬したとみられる箸墓古墳、北に崇神陵、南に崇神王宮をそれぞれ配置したということになる。

崇神帝が新たに南北バランスを採用して自らの陵墓を北に配置したのは、洪水や干ばつに伴う災害対策を本願としたほか、死後自らがアメノミナカヌシ神即ち北極星神となり、アマテラス神と並んでヤマト連合の守護神となることを強く意図したことによるものであろう。

ただし、奈良盆地は近江盆地と違って干ばつになりやすい地象であり、アマテラス神の神力が強すぎるとみて伊勢神宮を転々と移したことは周知のとおりである。

なお、陰陽五行思想によれば神祀りを行う場所は生と死の間、即ち陵墓の予定地と王宮の中間地で行うことになる。しかも、その地は明堂水即ち聖水の流れる水辺であることが必要となるので、巻向川のほとりを選んだのであろう。しかし、この川も流路がたびたび変わったとみられるので、神祀りを行っていた場所が動くのは致し方のないことである。

#### 4 連合王の祭祀

水田稲作を生業とする弥生人にとって最も重要な神は、穀物神・大地神・太陽神・水神であり、シャーマンである王の仕事は、陰陽のバランスが崩れて神の怒りに触れることのないよう祈願をし、奉仕をすることである。

こうした祭祀の基本的な在り方は、祭祀具が銅剣・銅鐸などから鉄剣・銅鏡に変わっても大きく変わることはなかったとみられるものの、洪水や干ばつで被害があったとき、王の普段の行いに問題があったとみられ、被害が軽ければ交代、重ければ殺されるという厳しい責任が伴っていた。

この点が中国の皇帝とは違っている。皇帝は自ら責任を負うことはなく、責めを負うのはNo.2の丞相じょうしょうで、皇帝から辞任を求める使者がくると、直ちに城門から退出して去る決まりとなっている。

こうしたことから、災害の多い倭のクニグニでは王の在位期間は比較的短く、例えば出雲における歴代の王は、墳墓の築造年代からみて10年から15年で交代していたと推定されている。

したがって、卑弥呼が60年以上で壺與が30年以上とい



う在位期間の異常な長さは、極めて特異なことである。この間、邪馬台国に大洪水が一回もなかったとは到底考えられない。

となれば、二人の女王はその責任を取る必要はなかったということになる。取りも直さずそのことは二人が邪馬台国王ではなく、あくまでも邪馬台国連合の連合王であったことを示しているとみられる。

そのことを『魏志』では共立といい、連合の加入国が同意した連合王ということであって、邪馬台国王であったとは書かれていない。邪馬台国とは女王のいる都がある国だと書かれているので、邪馬台国王は別にいた可能性もあり、その場合彼も共立者のひとりであったということになる。

## 参考 近江を中心とした邪馬台国関連の年表

縄文時代

↓ 服部遺跡

弥生時代

紀元前

271年 下之郷遺跡（通説と年輪年代測定合致）

↓ 中国・朝鮮の混乱に伴いこの頃から渡来人増加  
一般民（円形環溝）と指導者（方形環溝）の居住区分離  
環溝内に大型建物が登場

108年 前漢武帝が朝鮮に4郡設

70年 この頃播磨田東遺跡

50年 この頃奴国・伊都国の同盟が前漢に朝貢

↓ 墳墓の大型化

紀元後

1年 王莽が実権を握り国政の総覧者に

4年 王莽が長安城の南郊に明堂を設置

5年 伊都国同盟が前漢に朝貢か

8年 王莽が新を建国

23年 新滅亡

- 25年 後漢光武帝が即位し洛陽に遷都
- 50年 この頃池上曾根遺跡（年輪年代測定に誤差）  
この頃二ノ畔横枕遺跡（同上）
- 57年 伊都国連合が後漢光武帝に朝貢  
↓ 伊都国にいた連合王が邪馬台国に東遷  
奴国にいた同盟王が狗奴国に東遷
- 90年 この頃酒寺遺跡
- 98年 邪馬台国連合成立し伊勢遺跡設置  
↓ 狗奴国同盟成立
- 107年 狗奴国同盟と邪馬台国連合が後漢に朝貢
- 132年 高句麗国祖王が楽浪郡太守を捕縛
- 150年 この頃狗奴国同盟象鼻山に上円下方壇設置
- 177年 2回の大震災と凶作で倭国大乱か  
↓
- 184年 遼東郡太守に公孫度
- 185年 邪馬台国連合が卑弥呼を女王に共立  
狗奴国の卑弥弓呼王が卑弥呼と対立
- 186年 中平年間に卑弥呼が後漢に朝貢か  
↓

- 189 年
- 192 年 長安遷都を強行した実力者董卓が被殺  
公孫度が遼東侯を名乗り楽浪郡を回復
- 193 年 卑弥呼と卑弥弓呼が公孫度に貢納か
- 204 年 遼東侯公孫康が立ち帯方郡設置
- 205 年 卑弥呼と卑弥弓呼が公孫康に貢納か
- 220 年 後漢が滅び魏建国
- 228 年 遼東侯公孫淵が立つ
- 229 年 卑弥呼と狗奴国王が公孫淵に貢納か
- 238 年 魏が公孫を滅ぼし各郡に太守派遣  
邪馬台国と狗奴国対立激化し前者は劣勢  
卑弥呼が魏に朝貢
- 240 年 伊都国に帯方郡の使者来着
- 243 年 卑弥呼が魏に朝貢し救援依頼
- 245 年 魏が卑弥呼に魏の軍旗黄幢を下賜
- 247 年 楽浪郡と帯方郡に濊族・韓族が乱入し激戦  
卑弥呼が帯方郡に救援嘆願  
魏が邪馬台国連合に帯方郡の武官派遣
- 248 年 武官が到着したとき卑弥呼は既に死去

- 249年 邪馬台国連合が男王を共立し内乱発生
- 250年 邪馬台国連合が耆與を共立し内乱終息
- 251年 耆與が魏に朝貢し武官帰国
- 264年 狗奴国同盟王死去か（象鼻山1号墳被葬者）
- 265年 魏が滅び晋建国
- 狗奴国同盟が邪馬台国連合に合流か
- 連合摂政に和泉物部系の崇神が就任か
- 耆與が象鼻山で二至の祀りか
- 266年 耆與が晋武帝に朝貢
- 285年 この頃晋の朝鮮支配力が弱体化
- 漢人の商人が倭国との交易から撤退か
- 286年 高句麗西川王が帯方郡を攻撃
- 287年 伊都国女王死去か
- 耆與が死去か
- 288年 ヤマト連合発足か
- 都を大和の磐余に置き初代連合王に崇神か
- 耆與の本埋葬ため箸墓古墳の築造開始か
- 289年 ヤマト連合の30カ国余が晋に朝貢か
- 290年 晋の恵帝立つ

300年 趙王倫が恵帝を幽閉し八王の乱

307年 晋の懷帝立つ

313年 晋の愍帝立つ

316年 晋滅亡

注) C14 測定法に基づき奈良県ホケノ山古墳（桜井市）は卑弥呼の墓の可能性があるとされたが、測定に誤差のあることがわかり、290～320年の築造とする通説に戻ったとみられることからすれば、<sup>ふる</sup>布留式土器・<sup>が もんたいしんじゅうきょう</sup>画文帯神獸鏡の弥生末期への遡及もないことになる。

**著者略歴** 千城 央 (ちぎ ひさし)

本名 佐藤明男

1946年 宮城県生まれ

1969年 山形大学文理学部卒

2006年 宮城県出納局長

2011年 宮城県図書館長

2015年 守山弥生遺跡研究会会員

## **主要著書**

2012年 古代東北の城柵と北斗七星の祭祀

無明舎出版

2012年 新版・ゆりかごのヤマト王朝

無明舎出版

2013年 エミシとヤマトー鉄と馬と黄金の争奪ー

河北新報出版センター

2014年 近江にいた弥生の大倭王

サンライズ出版

2015年 邪馬壹国からヤマト国へ

サンライズ出版